アグネスデジタルと性癖について語り合う話

さば缶

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アグネスデジタルとトレーナーがウマ娘への性癖を語り合う話

目次

アグネスデジタルと性癖について語り合う話 ―――― 1
ナリタタイシンが後悔するのっていいよね ―――― 5
ミホノブルボンにトレーナーを辞めるとドッキリ仕掛けるとどうなるのか ―――― 10
ウマ娘の心が折れる瞬間って悪魔的な魅力があるよね ―――― 14
湿度高めなナイスネイチャとトレーナー ―――― 17
サトノダイヤモンドのひもになれたらなぁ（願望） ―――― 21
アグネスデジタルの想い～トレセン学園入学前① ―――― 24
アグネスデジタルの想い～トレセン学園入学前② ―――― 28
アグネスデジタルの想い～トレセン学園入学前③ ―――― 32
ウマ娘と幼馴染になってそのトレーナーになるには前世でどれだけ得を積めばいいですか ―――― 37
幼馴染なシンボリルドルフとトレーナー① ―――― 41
幼馴染なシンボリルドルフとトレーナー

②～お風呂 ―――――― 45
幼馴染なシンボリルドルフとトレーナー③～約束 ―――――― 48
トレーナーの仕事を辞めた場合～ナリタタイシン① ―――――― 56
トレーナーの仕事を辞めた場合～ナリタタイシン②あなたを迎えに行くから 59
トレーナーの仕事を辞めた場合～ナリタタイシン③あなたをもう絶対に離さない ―――――― 63
タキオンさんにドッキリを仕掛けたい 76
スマホゲームでアグネスデジタルをお迎えする話 ―――――― 80
やめてスペちゃん！アグネスデジタルのライフはもう０よ！ ―――――― 85
ウマ娘職人、アグネスデジタルの朝は早い ―――――― 93
媚薬とアグネスタキオン ―――――― 100
オタクに優しいウマ娘ちゃんは実在するのか ―――――― 106
結婚式のご案内　ｆｒｏｍエイシンフラッシュ ―――――― 113
ウマ娘ちゃんと同室になりたいという願望 ―――――― 118

小学生のキタちゃん「将来はトレーナーさんとけっこんしますー」 ―――― 124
キタちゃん「トレーナーさんと結婚します」 ～キタちゃんサイド ―――― 130
キタちゃん「トレーナーさんと結婚します」 ～トレセン学園入学前 ―――― 137
キタちゃんとダイヤちゃんを応援する会（非公認） ―――― 142
ダイヤちゃんに借金してみた ―――― 147
重馬場ナイスネイチャってていいよねって話 ―――― 155
勘違い系　重馬場ナイスネイチャ 159
キングヘイローとトレーナの物語～皐月賞 ―――― 165
キングヘイローとトレーナの物語～日本ダービー ―――― 169
キングヘイローとそのトレーナーの物語～夏合宿前 ―――― 177
ウマ娘ちゃんの曇った顔はガンにも効く ―――― 182
特別移籍～ナリタタイシン ―――― 187
ウマ娘が力加減を間違えてしまったら～ダイワスカーレット ―――― 192
キングヘイローとそのトレーナーの物語～夏合宿 ―――― 197

当然のように部屋にいる　セイウンスカイ ―――― 204
当然のように部屋にいる　セイウンスカイ② ―――― 213
当然のように部屋にいる　セイウンスカイ③ ―――― 223
ナイスネイチャ「お金持ちのイケメン彼氏を常時募集中で～す」 ―――― 230

アグネスデジタルと性癖について語り合う話

アグネスデジタルとはよく話をする。
今回はセイウンスカイについて話し始めたのがきっかけだった。
「スカイさんは非常に負けず嫌いであってほしい」
そんなデジタルの一言から会話はヒートアップしていった。
「わかる」
「わかってくださいますか！スカイさんだからこそより映えると思うんです」
まくしたてるようにデジタルは続ける
「スカイさんのいいところってあのつかみどころのない性格だと思うんですよ」
「だからこそ周りに対しても例えばレースで負けてしまっても
「あちゃ～、負けちゃったよ○○ちゃん。次は負けないからね～」って私はそこまで勝ちを渇望していたわけではないよって感じで負けた直後でもへらっとした表情をしていて」
「けれど彼女だってそのレースに向けて毎日つらいトレーニングを積んできたはず。だからこそ悔しいとは感じつつもそれを周りに出してしまうのは自分のキャラではない

なとわざとへらってしていて
「すごいね〇〇ちゃんは、完敗だよ～」
「ラストの伸びはセイちゃんといえどももかなわなかったよ～」
　って自身の悔しさを隠すかのように相手を称えるという状況を想定していて」
「個人的にはその敗北がにラストの直線の最後の最後で抜かされて惜敗だとなおよし」
「あ～それいいですね。やりますね流石トレーナーさん！」
「えっとそんでさらに続けていくと、勝ったウマ娘さんと観客の両方に見えない角度で一瞬だけ
　唇から血がにじむなってくらい悔しがっててほしいな…なんて思ったり」
「そのあとライブの準備をするためにいったん準備室に戻る際に猛烈に悔しがってほしい。それこそ負けた直後にすぐさま吐き出せなかった分を全部。」
「決して油断していたわけでも、調子が悪かったわけでもない。それでもなお最後の最後で負けてしまう事があるのがウマ娘の勝負の世界の厳しさだよな。」
「ほんとにその通りですよ。デジたん的には最悪ほかのウマ娘さんのセンターが見れますのでそれはそれでいいですけどそれでもやっぱり悔しいですよ。ってデジたんの話はさておき」
「やっぱりね、レースに負けることはほんとに悔しいんですよ

、だからこそスカイさんにはいつものあの性格でのんびりしているように見えても、胸の内では次のレースに向けて猛烈な執念を燃やしていてほしいとデジたん的には考えています。」
「トレーナーさん的には何かあったりしますか?」
「そうだな。個人的にはその悔しさを担当のトレーナーと二人で共有していてほしい、と考えている」
「と、いうとやっぱりトレーナーさん的にはやっぱり担当うま娘のことはよく知っておきたい的な感じですか?」
「あ〜、もちろんそういう側面もあるんだけど、今回のこの状況だと、
担当のトレーナーがセイウンスカイの心のよりどころであってほしいんだよね。」
「なんならもっと言うとセイウンスカイからトレーナーに対して若干依存心のようなものを抱いているともっと個人的には好き」
「トレーナーとウマ娘さんのずぶずぶな関係、デジたん的には大好きです。」
「トレーナーとウマ娘って二人三脚で勝利を目指す関係上、
中には今言ったような依存心にも似た信頼関係が形成されてしまっていてもおかしくないと考えている。」
「こんなことは周りには大きな声では言えないがこうした関係性のウマ娘やトレーナー

を見ると

なんだか妄想が捗ってしまうんだよなぁ」

「わかりますよー・トレーナーさん。

レースに限らずウマ娘さんからの重い思いってホントにデジたん的にも妄想がはかどり過ぎます～」

「だよなー、ほんといいよな～」

今日も二人のウマ娘オタクの妄想は止まらない。

ナリタタイシンが後悔するのってていいよね

今回もまたアグネスデジタルと語り合っていた。
それはトレーナーからの
「ナリタタイシンがトレーナーに暴言を吐いてしまい、その次の日トレーナーが事故にあってしまう。そして猛烈に自身の今までの言動を後悔するっていう状況って良くない？」
という一言から始まった。
「ほら、彼女ってさトレーナーに対してさ割と辛辣なことで有名じゃん」
「まぁ、それも信頼の裏返しみたいなとこはあるんだろうけど、そんなツンデレ系ウマ娘の代表格である彼女の歪んだ顔って興味ない？」
そんな突拍子もない問いかけに対してもデジタルはすぐさま反応してきた
「「私はそんなつもりであんなことを言ったわけじゃない」と本人的には思っているんだけどそれを弁明する機会はもうないことを死ぬ気で後悔する感じですね」
「事故に遭った＝トレーナーが死んでしまった、って勘違いして死ぬほど後悔するやつ」

「いままでの当たり前がもう取り戻せないという事実に打ちひしがれてほしい」
「タイシン自身にも今までなんやかんやできつくトレーナーに当たってしまっていた負い目はあったけど、それを言い出せないままトレーナーと過ごしている矢先での出来事だと相当よし」
「悪魔的発想、奇才現る！」
「よせいや」
　ナリタタイシンのようなトレーナーに対して一種の照れ隠しできつく当たってしまうウマ娘は少なくない。
　だが、トレーナーとしては実際にウマ娘たちがどういった感情でそうした言葉などを使ってきているかどうかはわからない。
　だからこそ少なからず傷ついている可能性もある。
　そうした事実にも発言をしてしまったウマ娘自身薄々感づいてはいるが、過去の発言を謝ることのできる娘は少ないと思う。
「タイシンの場合は、トレーナーが事故にあって以降いまいちその実感がわかないまま日々を過ごすんだけど毎日トレーナーと一緒にプレイしていてフレンドだったトレーナーのアカウントがログイン〇〇日前って表示されているのを見て
　あっ、トレーナーはもういないんだ。って現実を実感してほしい」

「そのシチュエーションデジたん的にポイント高いです」
「そうだろぉ～」
二人のウマ娘オタクの会話は続いた。
そんでもって
こんなめんどくさい性格のウマ娘にも優しく接してくれたなとか
トレーナーといる時間は何より楽しかったなって
それなのに自分はってナリタタイシンが自己嫌悪に陥っている矢先に
「しれっとトレーナーが怪我が治ったので、復帰しましたってトレーナーが自分の前に現れていろんな感情がごちゃごちゃになって彼女にしては珍しく人前で泣き出してほしい」
「普段気丈にふるまっているウマ娘が何かが原因で感情が爆発しちゃうのいいですよね」
「すぐさまトレーナーの胸の中に飛び込んで、ここで真っ先に
「今までトレーナーの気持ちも考えないできつく当たってごめん」って謝るのと
「心配したんだからね、馬鹿…」って小さな声でトレーナーの胸の中でつぶやくのどっちの方がいいかな?」
「デジたん的にはどちらでもキュンキュンしちゃう状況ですがしいて言うなら

「心配したんだからね、馬鹿…」
　ってほうですかね」
「ちなみにその心は？」
「えーっとですね、デジたん的解釈ですとタイシンさんは過去の自身のきつく当たってしまった発言は確かに後悔しているのですが、それ以上にトレーナーとまた一緒にいられるという事実の方が嬉しいはず…という考えでして」
「なるほど、確かにそういわれると一理ある」
「トレーナーさん的にはもう一個の方でしたか？」
「えーっとねこれはタイシンのトレーナーに対しての依存度によって変わると考えていて
　例えば、「今までトレーナーの気持ちも考えないできつく当たってごめん」って謝る方だとして
　僕はきつく当ってしまうのは一種のタイシンの自己表現みたいなものだと思っている。
　だからこそその行為そのものを第一声として謝罪するという行為が
　もうあのような言動はとらないから自分の前からはいなくならないでほしい
　自分のことを見捨てないでほしいという懇願のようにも聞こえるんだ」

「だからこそこの発言はより一層トレーナーに対するタイシンの依存度が高いことが感じ取れて個人的にはこっちのほうが好き」

今日も二人のウマ娘オタクの妄想は止まらない。

ミホノブルボンにトレーナーを辞めるとドッキリ仕掛けるとどうなるのか

「好感度マックスのミホノブルボンに冗談でトレーナーを辞めるって言ったらどうなると思う?」
「むむっ!それはなかなか面白そうな疑問ですね、トレーナーさん」
いつものようにアグネスデジタルとウマ娘について語り合っていたらふとそんなことを思い立った。状況としてはこんな感じだろうか

私の名前はミホノブルボン。
トレセン学園に通うウマ娘の一人である。
トレセン学園で私はマスターに出会った。
マスターは偉大だ。彼の考えるトレーニングはいつも私に最適化された素晴らしいものだ
マスターは偉大だ。私のような感情の起伏が少ないウマ娘に対しても毎日相手をし

てくれる。
マスターは偉大だ。彼の存在のおかげで私は三冠を達成できた。
マスターの素晴らしいところを挙げればきりがない。
そんなマスターの担当ウマ娘でいれて私は幸せだ。
だからこそそんな彼の口からあのようなことを聞いた時私ははじめ理解ができなかった
「あ～そういえばブルボンに報告することがあって」
「何でしょうか、マスター」
「僕、来月にはトレーナー辞めるんだ。」
「エラー、すいませんマスターよく聞き取れまえんでした。お手数ですが再度仰っていただけますと幸いです。」
「来月にトレーナーを辞めてこの学園を去るんだ。ブルボン」
いまマスターは何といった?
トレーナーを辞めるとはっきりそう言っていた。
マスターがトレーナーを辞める?トレセン学園を去る?
それってもうマスターに会えなくなるってこと?
マスターと一緒にいられないということ?

「っ了解しました。マ、マスターのご決断でしたら私が口をはさむ権利はありません」
「ただ、ここまで私が来ることができたのはマスターのおかげです。今の私があるのはマスターの存在があってこそです。だからこそそのマスターがトレーナーを辞めてしますというのはほんとに悲しいことですが、私は応援しています。」
　矢継ぎ早にそう言い切った彼女の目は大きくうるんでいた。
「用事を思い出しました。失礼します」
　消え入るような小さな声で彼女は部屋を後にしようとした
「ちょっと待って、ごめんブルボン。これドッキリなんだ。トレーナーを辞めて学園を去るっていうのは嘘でドッキリなんだ。すまない」

「…マスター?」
「はい」
「私はいま怒っています」
「すまない…僕にできることだったらなんでもする。それでブルボンの気が晴れるとは思ってないけどせめてもの僕からの謝罪だ」
「なんでも?と仰っいましたねマスター?」
「ん?ああ!なんでもだ」

「今度の日曜日の予定は空いていますか、マスター」
「えっと、日曜日は特に予定はない」
「マスター、日曜日にお父さんに会ってください」
「?!」
「お父さんと?!会う?やはりそれほど君を傷つけてしまったのだろうか」
「いえ、マスター確かに先ほど私が驚きそして?を付かれたことに傷ついたのは事実です。
　しかしそれ以上に私はマスターともっと一緒にいたいと感じたのです。」
「もう逃がしません。マスター」
「マスターと一緒に行動することが最優先だと判断、今後一生」
「といった風になったらおもしろそうだと思うんだけどどうだろうか」
「ブルボンさんからの逆プロポーズほんとすこ」
「ただ、個人的にはブルボンさんのような人がもう少し取り乱すパターンもありな気がします」
「あ～わかるそれ。生真面目なあの話し方の原型が無いってくらい取り乱してトレーナーに懇願してくるタイプのブルボン見たいな」
　今日もまた二人のウマ娘オタクの妄想は止まらない。

ウマ娘の心が折れる瞬間って悪魔的な魅力があるよね

「未来に満ち溢れていた幼くて明るかったウマ娘が心折れちゃう展開ってまるで麻薬にも似た中毒性があると思うのですがこの考えは異端なのでしょうか？トレーナー神父」
「いいえ。あなたのその思いは決して異端なのではありません。むしろその思いを大切にしてください。デジタル信徒」
「とまあ、茶番はここまでにして」
「はい、そうですね。トレーナーさん」
「ウマ娘さんたちの曇った表情を見るのも好きだし、それをまた晴らせるのも好きだ」
「分かります！デジたん的にはどちらも大好物ですが曇った部分の描写が深ければ深いほど好きです。」
「曇り部分の描写で心が折れるときにどう折れるかっていうのも重要だよな」
「その点はデジたんこの前、他の方が書いている話で
「ウマ娘プリティーダービーＳｅａｓｏｎ２」っていうタイトルでトウカイテイオーさんが主人公の話を見つけたんですけど、そこの中の描写がほんとに素晴らしいテイ虐でして…」

「その話は僕も見たことあるぞ！確かに素晴らしいテイ虐だった。」
「底抜けに明るくてファンや周りのみんなから愛されている前提があるテイオーさんだからこそのあそこのシーンはほんとに感情移入して涙なしではいられない反面、それまで必死に頑張っていた彼女の心がぽきっと折れちゃうところはテイ虐の民としては絶頂ものですよ」
「確か9話目くらいのシーンだったっけ？グラウンドでマックイーンと二人でさ」
「そうです。そこの場面です。いままで何とかリハビリを行っていたが、薄っすらと以前の自分のようには走れなのではないかと気づいていながらそこには目をつぶって頑張っていたテイオーさんが、最後にはライバルであるメジロマックイーンさんの走りが最後の一押しになって心が折れてしまう。あのシーンです。」
「マックイーンには一切悪気はなくて、それどころか自分の走りでライバルを鼓舞してあげようとまでしてあげてるんだけどその走りこそが最後のとどめになってしまったっていうのがほんとに辛いしほんとに好き」
「デジたん的にはテイオーさんの心の方はもうとっくに折れていて、けどまだ折れ切ってはいなくて、それでも周りの応援や支えがあるからなんとか自分をだまして頑張って最後の最後で遂にもう無理なんだなと自覚しちゃう原因作ったライバルっていう構図が素晴らしくて…」

「さらに追加で言うとマックイーンからは日差しの逆光で心の折れたテイオーの姿はまだ見えていなくてまだ復活を信じているというのも状況としては相当よし」
「止められずに計測し続けるストップウォッチの描写はその瞬間のテイオーの心情を表しているようでほんとにいいシーンだった」
「かつて自分の目標だった無敗の三冠ウマ娘を達成するというものが、気がつけば走ることすらできずに誰が見ても諦めるしかない状況になっているのがほんとに、もう」
「無敗の三冠ウマ娘から三冠ウマ娘へと目標を切り替えてそして最後にはウマ娘であることですらかなえられないとどんどん墜ちていくいく様は見る者の精神を変質させる悪魔的な魅力があるよな」
「まああまり大きな声では周りに言えないのが欠点ですけどね」
「間違いない」

今日も二人のウマ娘オタクの妄想は止まらない。

湿度高めなナイスネイチャとトレーナー

自己評価の低さゆえにトレーナーに対して自身の好意を伝えられなく悶々とした日々過ごしているナイスネイチャが、もしかしたらトレーナーにすでに恋人がいる可能性や好きな人がいるかもしれないと気になった。

そこでまずは探りを入れることにしたが

「そういえばトレーナーさんて誰かいい人とかいないんですか?」と質問するしたところ

「いい人っていうのは、えっと」と反応に困っているトレーナー。

「恋人とか好きな人とかっていないのかなって、年頃の女の子であるネイチャさんは気になったわけですよ」

と質問の追加説明をしたが

「今はそういう関係の人や好きな人はいないかな」

と解答をされ、好きな人が自分である可能性を少しは期待していた自分自身に嫌気がさして勝手に落ちこんでしまうナイスネイチャ

「あははー、それじゃあネイチャさんなんていかがですかー?トレーナーさんのことも

よく知ってますし優良物件ですよ」
と自虐の意味もこめて冗談でかえした。
トレーナーからも軽くあしらわれるもんだと高をくくっていたところ
トレーナー自身も「この娘は会話の一環のユーモアとしてこのような発言をしているのだな」と判断し、冗談で返すことにした。
「よくよく考えたら今一番仲良くしている女の子はネイチャだしそれもいいかもな」
そう答えたトレーナーにいつも通り
「おっいい判断してますねートレーナーさん。そう言ってもらえるとネイチャさん的にも本望ですよ」
といつもの自分のキャラを通そうとしたが自分としては冗談であってもつい嬉しくて喜びの気持ちが表に出るのを隠しきれないず顔を両手で覆って隠して
「ご、ごめんトレーナーさん。ちょっと用事を思い出したからそっちの方行くね」
と話し慌てるよう部屋を飛び出していくナイスネイチャをみていぶかしげになるトレーナーだったが、ネイチャとのそういう関係かともしもの状況を想像し先ほどの自分の発言通り悪くないかもなと感じていた。
そして部屋を後にしたナイスネイチャもしかして今さっき自分はあと少しでトレーナーと恋仲になっていたのではないかと過去の自身の行動を悶々と振り返っていた。

いつものように僕はデジタルにこういう状況って良いよねって妄想を語っていた。
今日は普段と違い中庭に集まってこんな話をしていた。
広大な敷地を誇るトレセン学園にはこのような妄想を語り合っても周りに迷惑のかからない人気の少ない場所も多い。
「こういう湿度高めのネイチャ×トレーナーっていいよね」
しかしいつもであったらすぐに何かしらの反応があるデジタルの様子が変だ。
まるで何かを恐れるかのように僕の後ろをみて口をパクパクとさせている。
後ろに何かあるのか。そう思い後ろを振り向くと満面の笑みのたずなさんが立っていた。
「楽しそうなお話は終わられましたか？」
ああ…人は笑顔でもこんなにも恐ろしくなれるのか。そこから僕らはたずなさんに連行され理事長室でしばらく反省文と始末書を書かされた。暫くしてたずなさんがちょうど席を外している時に理事長から予想外の一言があった。
「提案。私のドッキリに諸君らの知恵を貸してほしい」

ドッキリだと？今この現状がすでにたずなさんに大目玉を食らっているためこれ以上目を付けられたくないのが正直なところだった。デジタルの方を確認しても表情はそこまで乗り気ではなさそうだ。

そうした僕たちの反応を見て理事長は更に続けた。

「歓迎。諸君たちのその想像力を貸してほしい」

「想像！このトレセン学園にいるウマ娘たちの様々な表情を見たくはないか」

様々な表情だと？ドッキリともなるとその表情は多岐にわたる。場合によっては僕好みのいい表情が見られる可能性もある。

そしてそれは理事長の公認で可能である状況。

もしや理事長も僕らの同類なのだろうか。ともかくこの話を受けようと口を開こうとするとちょうどデジタルもとタイミングが重なった。

「やらせてください」

こうしてたずなさんに内緒で秘密裏に同盟は結ばれたのだった。

サトノダイヤモンドのひもになれたらなぁ（願望）

「サトノ家、ひいてはサトノダイヤモンドのひもになって一生甘やかされて過ごしてぇ〜」

思わず心の声が漏れた。

ちなみに僕はサトノダイヤモンドのトレーナーではない。

ほんとにただの願望である。

「ど、どうしたんですか急に。デジたんにも詳しく聞かせてください」

そう聞いてきたのはよく僕とオタクトークをしているアグネスデジタル。

前回たずなさんに見つかってしまって以降はなるべくバレないように主に僕のトレーナー室を使って話をしている。

「いや、、この前サトノダイヤモンドのトレーナーから相談を受けてさ。なんか最近、担当ウマ娘のサトノダイヤモンドのスキンシップが激しいらしくて。まあ本人もそこに関しては満更でもなさそうだからいいんだけど」

「仲いいですもんね。サトノダイヤモンドさんのトレーナーさんと。この前もどっかごはんに行ったんでしたっけ」

「そうそう。よくあいつとはトレーニングの相談もかねて飲みに行ったりするんだけど、最近はのろけ話みたいな話が多くてさ」
「さっきの話もその時聞いた話なんだよね。それにさ、どうやらサトノ家に直接招待されて、トレーナーとしての実力を買われたらしくて婿入りしないかって打診されてるんだって。」
「両親との顔合わせまで終えてて着実に外堀が埋められていってますね」
「結局は本人同士が決めることだから外野の僕らがとやかく言うことではないけど、冗談で「もうウマぴょいはしたのか？」って聞いたらぶん殴られたわ」
「それは攻めてますねトレーナさんｗｗｗ」
「お互いに信頼しあえる関係で、向こうの方から何なら言い寄ってきていて、その子がとびきりかわいくてスタイルもよくておまけに経済力もあって将来も安泰だなんて。もうこれは実質付き合っているといっても過言じゃないだろ」
「付き合っているどころか許嫁みたいなものですね、それ」
「ほんとにそうだよ。うらやましくて逆に笑えてくるよ」
「トレーナーとその担当ウマ娘が実はできていたって話はよく聞きますけど許嫁まで行ってそうなのはだいぶ珍しいですよね」
「けどそれだとトレーナーさんがさっき言っていた自分がサトノダイヤモンドさんのひ

もになりたいっていう願望はだいぶ厳しいように思うのですが」
「うっ…、まあその通りなんですけど。いいじゃん僕にも夢を見させてくれても」
「うらやましいよ～デジえもん～。僕も気のおけない中のウマ娘から人生の逆スカウトを受けたいよ～。」
「も、もしかしてデジたん今こ、ここ、告白されてたりしたりしている状況ではない、ですよね。」
「ん？なんで今僕が告白する話になっているんだ（笑）それに告白されたいのは僕の方だって。ハハハハハ」
「そ、そうですよね。勘違いして恥ずかしいです～ハハハハハ」
「けど！このアグネスデジタル！トレーナーさんとはだいぶ気のおけない仲であると思っております。それでですね。えっと、その」
「そうだな～こんな話デジタルぐらいにしかできないもんな。付き合いもなんやかんやで長いしな。今後もよろしくなデジタル」
「そういう話がしたかったわけではないんですけど…よろしくお願いします…」

アグネスデジタルの想い～トレセン学園入学前①

私は名家であるアグネス家にウマ娘として生をうけた。
アグネス家では私はそれ相応の品格が求められた。
アグネス家のウマ娘として恥ずかしくないように様々な教育を受けたと思う。この頃の私はただ盲目的に家の方針に従っていた。
親のいう通りにしていたら喜んでもらえる、まじめに家の方針に従ってさえいたら周りも喜んでくれた。そこに私らしさはなかったけれどそんな毎日に疑問はなかった。
そんな日々を過ごす中で彼女と出会ったのは何の変哲もないある休日のことだった。
私のほかにもアグネス家には様々なウマ娘がいた。
その日私はそのうちの一人であるアグネスタキオンと出会った。
一言でいうと彼女は変わり者だった。それは家の中でも共通認識で半ば腫物のように扱われていた彼女に対して私自身も最初はあまりいい印象を持っていなかった。
午前十一時過ぎ、午前の用事を終えて午後に向けて気持ちを向けていた私に一人のウマ娘が声をかけてきたのが始まりだった。
「やあ、ちょうどいま実験の被験体となってくれるウマ娘を探していてね。君、少々私の

実験に付き合ってくれたまえよ」

何だこいつは。

初対面の私に唐突に何を言い出すんだ。無視しよう、そう思い歩調を早めた。するとそうした私の反応を見て、

「おっと、私としたことが悪かったね。君のような優秀な実験対象を見るとついいつも早まってしまうのは私の悪い癖だな。反省しよう。それはそうと自己紹介がまだだったね。私の名前はアグネスタキオン、君と同じアグネス家のウマ娘さ。といっても君ほど家からの評価は高くないどころか厄介者扱いされているがねハハハハハ、アグネスデジタルくん」

ぺらぺらと話を進める目の前のウマ娘、アグネスタキオンと名乗っていたか？

この人があのアグネスタキオンか。変人だとは聞いていたがいざ関わることになるとめんどくさいなと感じたのが正直なところである。

「えっと、、どうもこんにちはアグネスタキオンさん。確かに私はアグネスデジタルですけど私たちは特に会ったこともないのによくご存じでしたね」

「もちろんだよ。アグネス家にいる全ウマ娘のデータはすべて把握済みさ。そのなかでも君の評価は君が思っている以上にアグネス家の中でも高い。それはひとえに君のまじめさかまたは別の要因がそうさせているのか。ぜひとも君のことをもっと知りた

かったっていうのもあるね。とりあえずいったん私のラボにでも行って少し話さないか」

午後からの予定もあるしそれにそもそもなぜ私がこのウマ娘の実験に付き合わなければならないのか。向こうはどうやら私に興味があるようだがこちらとしては特に何もない

「お断りします」

そう言い放ち私はその場を後にすることにした。すると前に立ちふさがるように彼女は移動し、

「まあ、待ちたまえよ。デジタル君。そうだな、ではこういうのはどうだろうか。２０００メートル、私と模擬戦をしてみないか。これに私が負けたらもう金輪際関わらないと約束しよう。まあもし私が勝ったら実験に付き合ってもらうことになるが。いかがだろうか」

しつこいな。なんで私がこのウマ娘のいうことを聞く必要があるのか。第一いきなり向こうから声をかけてきてそれで実験に付き合えなどといちゃもんにもほどがあるではないか。

とはいえここで断ってまたしつこく付きまとわれるのも面倒ではある。正直毎日に退屈していたことも自覚はあったので暇つぶし程度にこの誘いを受けようか。そう私

は判断した。

「いいですよ。けれど私が勝ったらもう二度と関わらないでくださいね」

ほんの些細な二人のウマ娘のいざこざ。この出会いが私のこれからを大きく変えていくだなんてその時は思いもしなかった。

アグネスデジタルの想い～トレセン学園入学前②

「いいですよ。けれど私が勝ったらもう二度と関わらないでくださいね」
そう言ってアグネスタキオンからの誘いを受けることにした。
このアグネスタキオンと名乗るウマ娘に負けて実験に付き合うのはめんどくさい。
走りには自信があるのでさっさと終わらしていつもの日常に戻ろう。
いつも通り周りに従い代り映えのない日々に戻ろう。そう思っていた。
私はレースを行う前まで私は油断していた。相手のことを見てすらいなかった。
だからこそレースの中でいやでも目の当たりにしたアグネスタキオンという本物に、
自身の中の感情が大きく揺さぶられたのを感じた。
間近で彼女の走りを見て私は悟った。なんて美しく、そして速いんだと。
彼女の走りに魅入られた。
ウマ娘、それは人とは少し異なる神秘的な種族。
もっと見たいと、そう思った。
レースで負けたことは確かにショックだった。
けれどただそれ以上に自分がいままでいかにウマ娘という存在を見てこなかったと

いう事実におどろいた。
　レース後にもかかわらず上の空だった私を見てアグネスタキオン、いやタキオンさんは私が悔しくて言葉を失っていると勘違いしたのだろうか。
　いや、実際はあなたの走りに感動していただけなんですけど。そうとは知らずタキオンさんは嬉しそうに近づいてきた。
「はっはっは！今回は私の勝ちのようだね。それではデジタル君、約束通り実験を手伝ってもらうよ。なあにただ被験体になってくれるだけでいいから簡単だよ」
「はっ、はい！タキオンさん！行きましょう。」
「あ、ああ。やる気があるのは被験体としては非常に望ましい、、、のだが、てっきりもう少し渋られるものだと思っていた、私としては嬉しい限りだがどういった心境の変化かな」
　タキオンさんがそう尋ねてくるが私は食い気味に答えた
「約束ですもんね！タキオンさん。ぜひ私を煮るなり焼くなり好きにしてください」
「そっ、そうか…。そこまでは言っていないのだが。いや、やる気があるのは結構。すぐにラボの方に向かうとしよう」
　ラボについてからはタキオンさんの実験に付き合った。

「本当はもっと大掛かりな設備や実験をしたいのだけどね。これ以上はどうしてもお金の方が足りなくてね、だから今後はウマ娘として自分で稼ぐためにトレセン学園への入学を検討しているんだよ」

　こんなにも自分のやりたいことをどん欲に行う彼女の姿を見て何もない自分が恥ずかしく思えた。生き生きとしている彼女をみて私もそうありたいと思う。けれどそうすれば…

「そうだな。君も私と一緒にトレセン学園へ入学しないか、デジタル君。」

　そう言い放った彼女の目は本気だった。アグネス家は確かにウマ娘の名家であるが、それでもトレセン学園への入学を許された例はほんの一握りである。

「無理ですよ。私なんかじゃ。それに私はタキオンさんのような走りはできない」

「そうかい?.先ほどのレースで間近で見たが君の走りは十分私にも匹敵する実力だったと思うが、まあ無理強いはしないよ」

　私がタキオンさんと同じ?.いやいやいやそんなはずはない。

　私程度があの美しい見る者に希望を与えてくれるあの走りと同じはずがない。

　ただ、もし私がトレセン学園へ入ることができたらタキオンさんのようなウマ娘がたくさんいるのだろうか。

　今まで以上にもっとたくさんのウマ娘がいるのだろうか。いまだに私のやりたいこ

とはわからないけど、今までなかったウマ娘のことをもっと知りたいという思いが自分の中から湧き上がってくるのを感じていた。

アグネスデジタルの想い～トレセン学園入学前③

「デジタル君、今度私とG1レースを直接会場まで見に行かないか？」
そのレースにはあのシンボリルドルフが出走するというのだ。
ぜひともそのレースは見てみたいとタキオンさんは言っていた。
タキオンさんから実験以外で誘われたのは意外だった。
正確にはレースの見学も実験の延長ではあったのだが。
確かに今まで映像上でレースを見たことは何度もあった。
けれどタキオンさん曰く現地のその場でしか感じ取れないものがあるとのこと。
特に断る理由はなかったので二つ返事で了承し、とうとう約束のその日を迎えた。
目当てのレースのほかにも様々なレースが開催される。すごい。レースの数だけその分ウマ娘はいる。
　ウマ娘はアイドルとしての側面をもつためレース後のライブまでがセットでレース以上にライブを楽しみにしているファンも多い。
「はっはっはっ！デジタル君も楽しんでくれているようで何よりだ。私はレースのデータをもう少し間近でとりたいのでライブに関しては少々失礼するよ」

レース？ライブ？レース…の順番でせわしなく移動しているとそう言い残してタキオンさんが離脱していった。

思えば私がレースにもライブにも夢中になっているのを見て付き合ってくれていたのかもしれない。

レースに出走しているウマ娘さんたちも私の目には輝いて見えた。こんな大勢のいる前で日ごろの成果を出すために全力で走る彼女たちは本当に偉大な存在に思えた。

素人の私でもレースがどれだけ大変で、これだけの観客の前で走ることのプレッシャーは大きくレース後の疲労は計り知れないだろう。

どうしてそんな状況で笑顔でライブができるのか。どうしてこれだけの観客を沸かすだけのパフォーマンスを実行できるのか。

すごい。すごい！私は人生で初めて夢中になれるものを見つけた。そう思えるほど私の心はウマ娘さんたちに奪われていた。

あっという間に時間は過ぎてついに当初の目標であるＧⅠレースの出走時間の５分前となった。タキオンさんのおかげで私もレースを間近で見ることができるようだ。

タキオンさん曰く、アグネス家の名前を出したらすんなりいい場所を提供してくれたの事。さすがですタキオンさん!!

あのシンボリルドルフが出走するレースだ。

またほかのウマ娘さんたちも粒ぞろいだ。会場の熱気も今日見てきた中で最高潮となりついにレースの開始を告げるファンファーレが鳴り響いた。

スタートの合図の号砲ののち一斉にウマ娘さんたちがスタートした。

今日一日いろんなレースを見てきた。実際のレースを走ったことがない私が今日あったレースと目の前のレースを比較してそれに優劣をつけるなど本当におこがましいと思う。けれど目の前のレースは優劣が着けれてしまうほどレベルが高かった。

実際に走っているウマ娘さんたちと比較して私は圧倒的に実践の経験がない。

だからこそこのレースに出るウマ娘たちの間で様々な戦略が練られそれが目の前でどのようにして繰り広げられているのか。

そこまでを理解できる実力がない自分が恥ずかしく思えた。けどそれであってもこのレース誰が勝ったとしてもおかしくないと思えるような、それだけ全員のレベルの高い戦いだったと思う。

それでもそのなかでも頭一つ抜けて実力のあるシンボリルドルフの勝利を疑うものは少なかっただろう。

ただ結果としてこのレースの１着は大きく荒れたものとなった。そのウマ娘は１７人中１３番人気だった。そのウマ娘の名前はギャロップダイナ。そんな彼女がこのＧ１レースを制すことができたのは単なる偶然か、はたまた必然かそれはわからない。

それでも彼女はG1という最高峰のレースを自身の実力で勝ち取ったのだ。それは賞賛されることはあってもけなされることなどあっていいはずない。あっていいはずがないのだ。

「なんだよ。ギャロップダイナが勝つのかよ。シンボリルドルフが勝つところがみたかった」

「シンボリルドルフ以外が勝ってどうすんだよ」

「一番人気のウマ娘が勝つところなんて望んでないよ」

「空気読めよ」

もちろんギャロップダイナのことを賞賛する声もあった。

あのシンボリルドルフを差し切ることを成し遂げたのだ。当然だ。彼女が成し遂げたことはとんでもない偉業のはずだ。

それでも周りからの彼女に対する冷たい反応は多かった。なんだこれは。なんでこんな心無いことをいう人たちがこんなにもいるのか。ひどい。だが今の私にできることなんて何も…

いや。あるではないか。今の私ができること。

私1人の声援なんてと諦めることは簡単だ

私1人の応援で何かが変わる可能性なんてないに等しい、ほんとにただの私の自己満

足だ

けれどもし、この私の応援が届く可能性がほんの少しでもあるのなら、ウマ娘さん達を支えるささいな一助になれるというのなら

だったら私が彼女のようなウマ娘を応援しよう。ファンになろう。

こんなしょうもない中傷に彼女たちが傷つくなんて馬鹿げている。私がそんな中傷をものともしないくらい応援してやる。推してやる！

私はウマ娘さんたちが好きだ。やっとわかった。自分の好きなことが見つかった。

だからこそ自分の好きが傷つくことが許せない

。彼女たちが傷つくことがないように自分が応援して見せよう。ファンになって見せよう。少しでも彼女たちの支えになれるように私ができることはファンとして支えてあげることだけだ。その時から私のやりたいことが確信に変わった。私、アグネスデジタルはすべてのウマ娘を彼女たちの幸せのために応援します！

ウマ娘と幼馴染になってそのトレーナーになるには前世でどれだけ得を積めばいいですか

その日もデジタルといつものように雑談をしていた。
「トレーナーとウマ娘が実は幼馴染だった。っていう設定良くないですか?デジタルさん」
「幼馴染!甘美な響ですねトレーナーさん」
「トレーナーとウマ娘の関係上どうしても年齢の方は少し離れがちになってしまうが、、」
「はい!デジタルの方から意見してもよろしいでしょうか!」
「うむ、続けたまえ。デジタル君」
「そのウマ娘さんがすでに入学前の段階からそのトレーナーさんに対して幼少期の信頼からくる感情が転じて恋愛感情になってしまっている、というのはいかがでしょうか」
「まさに天才の発想だよ。デジタル君」
「ありがたきお言葉」
「そうだな…それだとそのウマ娘は思いの相手がトレーナーのなったと知って追いかけ

るようにトレーナーのいる学園に入学するっていうのが自然な流れだろうか」
「入学前からすでに湿度マシマシの状態ってことですねトレーナーさん」
「ああ…。その通りだ。だがトレーナーの方はすでに立派な大人だから、それゆえにそのウマ娘のことはあくまで教え子としてみている。決して恋愛対象といった目線ではないというその対比が個人的にはありだと思う。」
「現役のトレーナーとしての意見はやはり参考になりますね。やっぱりトレーナーさん的には担当のウマ娘さんとの恋愛といった話は無しって感じですか？」
「ん？僕の話か。えっと、そうだな。少なくとも入学当初から手を出すようなトレーナーはさすがに問題があると思うから、こいつはロリコンだったんだなって少し引いちゃうな」
「けど、ある程度そのウマ娘と信頼関係が構築できているのであれば例えば学園卒業後とかであれば全然いいと思う。それに学園に在学中であっても立場の違いを両者の間でしっかりと納得できているんだったら恋仲になっていてもいいんじゃないかな。まあ周りには大きな声では言えないだろうけど」
「となると、トレーナーさん的には卒業後ですかねやっぱり。ウマ娘さんたちとお付き合いするっていうのは。」
「まあそうかなー。卒業間近で担当のウマ娘のほうから「実はトレーナーなことが…」っ

て打ち明けられる展開は個人的にはとても好きです。そこのところははデジタルにでもお願いしようか」
「まあ。考えておきますよ。ってこれ地味にセクハラっぽくないですかトレーナーさん」
「ハッハッハ…まじ?すまん」
「まあ、デジたん的にはやぶさかではないので許してあげましょう」
「おお、、そういってくれると助かるよ」
「それはそうと、話を戻しましょうかトレーナーさん」
「はい」
「デジたん的にはウマ娘さんのほうから積極的にアピールする展開もありだと思うんですけどトレーナーさん的にはやっぱりそういうのは無しですか」
「そういうのね。実はめっちゃ好きなんだよなぁ。さっきの自分の発言とおもいっきり矛盾してしまうんですけど、好きなんだよなぁ～」
「トレーナーはまあ頑張ってそのアピールを耐えてほしい反面でやっぱり自分に正直に好意を伝えてくれる存在が身近にいるっていうのはあこがれるな」
「なかなか難儀しそうな考えしてますね。トレーナーさん」
「そうはいってもな、デジタル君。自分に好意を向けてくれる存在というのは男女問わ

ずうれしいものだよ。ましてやそれが異性からの恋愛感情だったりしたら不快に思うトレーナーはいないとおもうんだけどなあ」

「なるほど。デジたん的にも参考になりました。とても」

今日も二人のウマ娘オタクの話は止まらない。

幼馴染なシンボリルドルフとトレーナー①

僕と担当ウマ娘は幼馴染だった。

幼馴染といっても歳は１０歳ほど離れているので実際には近所の高校生とそれを慕ってくれる女の子といった関係だったと思う。

女の子はウマ娘だった。

それでも小学生低学年だった女の子に足の速さで負けたのは少しショックだったのを覚えている。

その時何か約束をしていたような気がするが詳しい内容まではさすがに覚えていない。

そんな女の子との関係も僕が大学への進学を機に疎遠になっていた。

そのため、その女の子が自身が務めるトレセン学園に入学してきたときは驚いた。

遠目で見た彼女はずいぶんと大人びて見え、女の子というよりは彼女という表現の方が適切だった。

そんな彼女の成長を喜ばしく思う反面で向こうは僕のことなど覚えていないものだと思い少し寂しくもあった。

だからこそ彼女が自分のことを覚えていてくれたことは嬉しかったし、それどころか担当のトレーナーとして向こうから指名されてしまったときはとても驚いた。
正直彼女の実力と自分では釣り合っていないように思えたがこれも何かの縁だと思い、彼女と二人三脚で頑張ってきたつもりだ。
そんな彼女との挑戦もURAファイナル決勝での優勝をもって一旦区切りがついたのがほんの一か月前のこと。そんなある日の出来事だった。
「トレーナー君、今日の夜話したいことがあるのだが時間はあるだろうか。」
僕の担当ウマ娘であるシンボリルドルフからそんなことを聞かれたのは、彼女がURAファイナル決勝を制しおおよそ一か月ほど立った日のことだった。
「ああ。今日は特に予定は入っていないから大丈夫だ」
今日に限らず基本的には夜は家にいるので予定はない。
「それならよかった。21時ごろトレーナー君の部屋に行くから待っていてくれないだろうか。ぜひ顔を合わせて話したいことがあるんだ」
わざわざ僕の部屋に来て話したいことか。夜遅くに成人男性の部屋に年頃の娘が来るっていうのは世間体的にはだいぶ怪しい気もするが…。
しかしメディアへの露出の多いルドルフであればそこのところくらいは理解しているだろうし、いったい何の話だろうか。

「話したいことか。僕としては大丈夫だけど、ルドルフ的には門限とかは大丈夫なのか？なんならここでその話を聞いても問題なさそうなら話してくれてもいいぞ」

「そこの件だが心配無用だ、トレーナー君。すでに外泊の許可は取ってあるんだ。それにあまり他のウマ娘や他の人に聞かれるのは少し恥ずかしい話でね。できればトレーナー君の部屋でじっくり話したいのだがやはり迷惑だっただろうか」

外泊？聞き間違いだろうか。外泊？外出？の許可までとっているのか。

手を回すのが早いのはさすがルドルフといった感じだがいささか早すぎなような気がする。

今日僕が予定があったらどうする気だったのだろうか。

まあ、そこに関しては深く考えても仕方がないか。

「いや、そういう訳だったら大丈夫だ。今日の21時に僕の部屋だな。準備して待っておくよ」

「ありがとう、トレーナー君。一日千秋の思いで待ってくれると嬉しいぞ」

「ハハッ、首を長くして待っておくよ」

とりあえず今日この後にルドルフが来ることが確定したので部屋の片付けでもして綺麗にしておくか。

そういえばルドルフとじっくり話をするのも久々な気がする。思えばお互いに最近は忙しかったし、久々に彼女とゆっくり話すのも楽しみだ。

幼馴染なシンボリルドルフとトレーナー②～お風呂

時刻は２０時５０分。約束の時刻の１０分前となった。
天気予報の予想と反して外では雨が降っている。
季節は冬ということもあって雨も相まってか気温はだいぶ低めだ。
そんなことを考えているとふと部屋のチャイムが鳴った。
「はーい、いま行きます」
扉を開けるとそこには髪の毛までびしょ濡れのルドルフが立っていた。
「すまない。トレーナー君。まさか急な雨に降られるなんて思いもしなかった。こんな姿で部屋に上がるなど失礼だということは重々承知しているのだが」
そのように話す彼女の声は雨の音にかき消されだいぶ小さい。
彼女自身も雨に降られ結果びしょ濡れになってしまったことにだいぶ参っているのかもしれない。
「気にしないでいいから、早く上がって」
気まずそうにそのように告げるルドルフを部屋に招き入れ、そのまま洗面所まで通した。

「ルドルフとしては少し気が引けると思うけどお風呂に入ってほしい。
このまま濡れた状態で君に風邪をひかすわけにはいかない。」
そのように半ば強引に彼女に告げると
「すまない。トレーナー君に迷惑をかけてしまった。」
申し訳なさそうにしながらも彼女は承諾してくれた。
「気にしないでいいよ。いつも助けてもらってる分、ささいなもんさ。タオルはここにあるからね」
そうしてい意図せず担当ウマ娘が自身の家でお風呂に入るという状況が偶然出来上がったのだった。
「ルドルフ。お風呂に入ることを半ば強制しておいていう言葉ではないんだが、
着替えが僕が用意できるのものが自分の服しかないんだ。
濡らしてしまった制服は少し待てばどうにかできると思うんだけど少なくとも今は僕の服で我慢してもらうしかないんだが大丈夫だろうか」
「それは全くもって問題ない。むしろトレーナー君の服まで用意してもらって申し訳ないくらいだよ」
「それじゃあお言葉に甘えてお風呂の方をお借りするよ。ありがとうトレーナー君。」
彼女がお風呂に入っている間、先ほどの自身の言動がだいぶ強引であったと急に恥ず

かしくなってきた。
仕方のないことだったと思うがもう少し言い方などがあったかもしれない。
そしてふと冷静になって考えるといまルドルフが家のお風呂に入っているということは
お風呂場には彼女が裸でいる。
こんなことを考えるのはほんとに良くないのはわかっているのだが…
つい想像してしまい精神安定上とてもよくない。
悶々と彼女がお風呂から上がるのを待つ間に彼女の着替えを用意するなどして時間をつぶしたのだった。

幼馴染なシンボリルドルフとトレーナー③～約束

しばらくすると彼女がお風呂から上がってきた。
「ありがとうトレーナー君。とても助かったよ」
僕の用意した服を身につけそう告げる彼女の表情は心なしか風呂上がりのせいか火照って色っぽく見えなくもない。
何を考えているんだ。
別の話題を見つけるように彼女へ問いかけた。
「そういえば、ルドルフはもう夜ご飯は食べたのか？」
ふとそう尋ねると彼女は少し疲れた表情で答えた
「いや、実はあの後理事長から仕事を頼まれてね。気がつけば約束の時間にもう少しというところだったのでまだ食べれていないんだ」
彼女はトレセン学園の看板ともいえる存在だ。
ゆえにＵＲＡファイナル決勝が終わった後でも忙しいというのは不思議ではないがそれをこなしきるだけの彼女の器量にはいつも感心する。
「そういう事なら何か作らせてくれ。夜食には少し早いが僕も少し小腹がすいてきたか

らさ」
「そういってくれるのは助かるが、やはり迷惑ではないだろうか。お風呂まで借りてしまったし、一食抜く程度私はそこまで気にはならないぞ」
「そこまで気にしないでいいよ。半分趣味みたいなもんだし、まあゆっくり座って待ってて」
「そうか。そういうことならご相伴に預からせてもらおう。頭が上がらないなトレーナー君」
「チャーハンでいいか？ルドルフ」
「チャーハンか！以前食べたトレーナー君の料理は学園の料理人と比較しても遜色ないものだったと記憶してる。楽しみだよ」
「では満足してもらえるように頑張らなくちゃな。もう少し待っててくれ」
　高温で加熱した鍋に多めに油を投入する。数秒ののちすぐさま卵を投入、米を入れて卵とパラパラになるまでよく鍋を振る。
　残りの具材を投入し、最後に味付けだ。短時間でさっと仕上げるのがおいしさのコツだ。
「「いただきます」」
「美味しい」

彼女からのその一言が何よりうれしい。
「それはよかった」
美味しそうにチャーハンを食べる彼女の姿を見て僕としても作ったかいがあった。
「「ごちそうさまでした」」
さすがに後片付けくらいはさせてほしいというので彼女に任せた。
普段と同様に丁寧な仕事であっという間に片付いた彼女の手際の良さにはほれぼれとしてしまう。
ちょっとしたアクシデントもあったが一旦ひと段落ついて僕は自身のベットに腰を下ろしていた。
片づけを終えた彼女がこちらの方に移動してくる。
「トレーナー君、一つお願いを聞いてくれないだろうか」
めずらしいなと思った。
基本的には何でもできる彼女が僕にお願いか。
だからこそできる限り応えてあげたいと思う。
「大丈夫だ。ちなみにその内容というのは」
「本当か！内容は少し気恥ずかしいのだがな。
その、、トレーナー君のことを今だけはお兄ちゃんと呼んでもかまわないだろうか」

「懐かしいな、ルナちゃん。昔はよくそうやって呼んでくれてたね」
そういうと彼女は嬉しそうに笑った。
「それで今日はお兄ちゃんに話したいことがあってきたんだ」
そういえばそうだった。
そう言ってきた彼女の表情はいつものシンボリルドルフとしての気丈な姿とは少し異なり、なぜか一人の女の子としての姿に思えた。
お兄ちゃんという呼ばれ方は、かつてまだ僕がトレーナーになる前に
幼かったルドルフの面倒を見ていた時、彼女から呼ばれていた呼ばれ方だった。
「お兄ちゃんはさ、昔競走したときにした時の約束って覚えてたりする?」
「約束?あー約束ね!えっと…」
具体的な内容は覚えていないが確かに約束をしていたことは覚えている。
ただうろ覚えそうなこちらの反応を見て彼女は少し残念そうだった。
「ごめん!約束をした時のことは確かに覚えているんだけど、具体的な内容までは覚えていないんだ」
「いや、いいんだ。さすがにもう何年も前のことだ。覚えていなくても仕方がない」
「けど、お兄ちゃんはその約束を守ってくれる気はあるかい?」
そう聞いてきた彼女は不安そうな顔をしていた。

ただいつもの優しい彼女とは異なった一種の覚悟を決めたかのような雰囲気があった。
まるでこれから一世一代の告白をするかのようなそんな気迫があった。
「内容がわからないのが少し怖いけど…守るよ。昔のこととはいえルナちゃん自身と約束したことだしね」
それを聞いたルナちゃんは嬉しそうに耳や尾をピコピコ揺らした。
そしてなぜか僕の隣に寄り添うように腰かけた。
??!!
いや、いや?!。近くないですかルドルフさん。
めっちゃいい匂いするんですけど。
彼女の方を確認するが距離が近いため目線があってしまう。
こちらを見て照れくさそうに笑った彼女は普段は見せない女の子らしいというのだろうか?とても魅力的なものに見えたのだった…
何だこの状況は。
「フフッ、お兄ちゃんだったらそう言ってくれると信じていたよ」
「約束というのは「ルナと結婚してくれるって約束」なんだけど」
「わかってるんだ。子供の時にした口約束をいまだに信じている自分がおかしいってこ

とくらい」
「けどルナね、ずっと待ってたんだ。
　もしかしたらお兄ちゃんがこの約束を覚えていてルナにプロポーズしてくれるんじゃないかって。」
「けどね、お兄ちゃんはいつまでたっても私に告白なんてしてくれなくて」
「ルナもね、半分諦めかけてたしもう大人になろうとしたんだ」
「でも、ルナ気づいたんだ。告白は自分からしちゃってもいいんだって」
「でもルナね、頑張って我慢してたんだ。お兄ちゃんとルナじゃ生徒と先生の関係だから迷惑になるって。けどねお兄ちゃんがいろんな女の人と楽しそうに話しているのを見てどうしてももやもやとした気持ちがなくらなかった」
「誰かに取られるくらいだったら私がお兄ちゃんの一番になりたいって思いがどうしても抑えられなくて」
「ごめんね。お兄ちゃん。これは全部ルナの我儘。だからお兄ちゃんがこの話を真に受ける必要も義務もないんだ」
「けど、もしルナのことを受け入れてくれるんだったら今からほんの少しの間だけ目をつぶっていてほしい」
　そう話した彼女は本気だった。

紛れもない彼女の本心だった。
こんなにも自分のことを想ってくれる女の子はこの目の前のこの子だけだ。
あの時の約束が彼女を縛り付けてしまった。
彼女の方を見る。
まっすぐにこちらを見据えるその目はまさに皇帝の名に恥じない強さを持っていた。
一方でその手は震えていた。
彼女にここまでさせてしまったのだ。
覚悟を決めた僕は静かに目を閉じた。
「ほんとに私でいいの？」
彼女に対して静かにうなずいた。

「という導入で今度の即売会の同人誌を書こうと思っているのですが、生徒会にばれたら殺されますかね？トレーナーさん」
「デジタルだけじゃなくて毎回同人誌の手伝いをしている僕も一緒に殺されませんか　ねえ、そこのところどうなってるのデジタルさん」
「いやだなぁ、トレーナーさん。昔言ってくれたじゃないですか。これから僕たちは一

心同体だって。あの言葉は嘘だったんですか？」
「？じゃないけど～。こうなったらとことん付き合いますよ」
「そうでなくっちゃ！流石トレーナーさん！」
「はぁ～…今のうちから逃げの練習でもしておくか…」

トレーナーの仕事を辞めた場合～ナリタタイシン①

「俺、この仕事辞めようと思ってるんだ」

トレーナーの口からそんな言葉が漏らされたのは今思えば彼なりの最後のＳＯＳだったのだと思う。

私は彼に救いの手を差し出してあげるべきだった。

そんな彼からの最後のＳＯＳを私は無神経にも突き放してしまった。

は？

面白くないんだけどそういう冗談。

なに？本気で言ってんの

勝手にすれば？

そう言い放ち私はその場を立ち去ってしまった。

そしてこれが私たちのウマ娘とトレーナーとしての関係の最後の会話になった。

次の日からトレーナーは私の前から、それどころかトレセン学園そのものに姿を見せなくなった。

最初は単に連絡のし忘れ、すなわち無断欠勤だと思っていた。

次に来た時にきつく言ってやる、その程度に考えていた。
だけどトレーナーはその次の日も、また次の日も学園に姿を現さなかった。
そうしてトレーナーが姿を現さなくなってから1週間が経とうという頃、私は理事長の方から直接呼び出された。
「トレーナー君から正式にこの学園を辞めると連絡が先ほど入った。」
は？何を言っているんだ。この人は
私のトレーナーが辞めたって言ったのか
「担当ウマ娘として何か彼の方から聞いていることはないか」
トレーナーが学園を辞めたという事実は私にとってあまりに大きな事実だった。私は理事長から告げられたその言葉をを受け入れることができなかった。
思い当たる節がないといえば嘘になる。彼と最後にあったあの時彼は確かに辞めるということをほのめかしていたと気づく。
まさか本当にあの後辞めてしまうとは思わなかった。
あの時のトレーナーの言葉は彼の本心だったのか。
なんで彼がそんなことを私に漏らしたかは定かではない。
けれどもしかしたら最後に、ほんとに最後の最後に私から引き留めてもらえると思って漏らした言葉だったかもしれない。

私はその最後の助けを求める声に気がつけなかったのだ。
そのあとのことはうろ覚えだ。
何も知らないと、そういうと今後のことについて説明があったと思うがよく覚えていない。
その後の彼がいない生活は退屈だった。
私を心配して励ましてくれる仲間もいた。
特にビワハヤヒデやウイニングチケットは特に気にかけてくれていたと思う
けれど私の生活は以前に比べて楽しいと思えなくなった。
それだけ私の中で彼と共に過ごしてきた日々がかけがえのないものとなっていたのだった。
失って初めてその毎日の大切さに気が付いた。
「どこにいるの?トレーナー」
そう自分の口からこぼれた言葉はとても弱弱しかった。

トレーナーの仕事を辞めた場合～ナリタタイシン②あなたを迎えに行くから

しばらくして私に新しい臨時のトレーナーも決まった。
このまま担当のトレーナーが不在のままではまずいという学園側からの判断だったのだろう。
しかし私にとっては正直どうでもいいことだった。
私にとってのトレーナーはあの人だけだから。
一方で新しい臨時トレーナーはとても親切でそして教え方もわかりやすかった。
それもあってか、いなくなってしまったトレーナーとの日々を忘れるように私はトレーニングに没頭した。
周りからは心配の声もあったがトレーニングをしている時は嫌なことを忘れられたので特に気に留めてなかった。
その努力もあってか私はＧＩレースでも結果を出すことができた。
だけど私の中に空いた心の穴が本質的に埋まることは決してなかった。
会いたいよ。トレーナー…

その私の本心が満たされることはなかった。
トレーナーがいなくなってしばらくが立った日、私はまたしても理事長室に呼び出されていた。
いったい何だというのか。
「失礼します」
「歓迎！よく来てくれた」
「それでわざわざ私をよんだのはなぜでしょうか」
「質問、君は最近毎日に満足しているか？」
いきなり呼びつけておいてそんなことを聞くためだったのか
「別に普通ですけど、わざわざそれを聞くために理事長室まで呼びつけたんですか」
「否定！だがこの質問への君の本当の答えを知りたい」
「疑問！君は本当に毎日を楽しんでいるのか？」
「解答！君の先ほどの疑問への答えだが、ビワハヤヒデとウイニングチケットから君が最近元気がなくてどうにかしてやってほしいと相談を受けてる」
「もう一度聞く！君は今の現状に本当に満足しているのか？」
私が今の現状が楽しいかって？
そんなの違うにきまってる。

あの日トレーナーがいなくなった日から私の毎日は完全に色あせてしまった。
会えるなら会いたい
けれど居場所すらわからない私にはどうすることもできない。
「…不満ですよ」
「トレーナーは私を捨ててどこかにいなくなった。
会いたいですよ！会って謝りたいよ！
けどもうどうすることだってできないじゃないですか!!!」
「提案！だったら会えばいい！」

何を言い出すかと思えば理事長からは会えばいいといわれた。
私はその言葉を聞いて腹が立ってきた。
会えるのならば会いたいにきまってる。
けど肝心の居場所がわからないのにどうやって…
そんな無責任なことをいう理事長に失望し部屋を後にしようとしたその時だった。
「謝罪、調べるのに少々手間取ってしまった。興信所に依頼して先日トレーナーの居場所がやっとわかった」
トレーナーの居場所が分かった？

理事長は確かにそういったのか

部屋を出ていく気だった私の気はすっかり失せ、その話に飛びついた

「本当なんですか、その話」

「肯定。しかしこの話をしたのは今君が初めてだ。また今後も第三者に広めるつもりもないだから他言無用でお願いしたい。」

「そんな大事な話私にしてもいいんですか?」

「肯定! 君だからするんだ。トレーナーと最も親しかった担当ウマ娘である君だからこそだ。そしてトレーナーを可能だったらこの学園に呼び戻してほしい」

そういった理事長から一封の封筒を渡された。

その中にはトレーナーの今の住所が書いてある紙と必要経費としての万札が幾分か入っていた。

こうなると授業やトレーニングのことなど、どうでもよかった。

ここに行けばトレーナーに会えるかもしれない。

それ以上に大事なことは今の私にはなかった。

その日のうちに私はトレセン学園から飛び出したのだった。

トレーナーの仕事を辞めた場合～ナリタタイシン③あなたをもう絶対に離さない

封筒の中の紙に書いてあった住所は学園から遠く離れた北海道だった。
空港で当日発着の飛行機を急遽予約し、私は学園のある東京を後にしたのだった。
北海道で空港に到着してからはアプリの案内に従い、電車を乗り継いで住所にあった場所の近くに来た頃にはすっかり暗くなっていた。
詳細な住所の場所には明日行こうと思い、今日は近くのホテルで一夜を明かそうとスマホで近くのホテルを調べた。
しかし不運にも近隣のホテルはすでに満室で今日泊まれる部屋はないという事実がわかっただけだった。
「ほんと最悪」
悪態を漏らしたところで空いていないものはどうしようもない。
私としたことが迂闊だった。
最悪、今日はカラオケや漫画喫茶で過ごすしかないと思っていた。
長旅で正直疲れていたがお腹がすいたので開いている適当な飯屋で夜ご飯を済ます

ことにしたのだった。
適当に選んだ割に料理の方は中々おいしいものだった。
トレーナーと一緒によく外でご飯を食べたっけな
一人でご飯を食べながらふとそう思った。
偏食な私を気遣ってよくトレーナーの方からご飯に誘ってくれていた。
そんな彼の気遣いを当たり前だと思っていたけどこうして一人で食べるご飯よりも彼と一緒に食べていたあの時のことを一層思い出す。
けれどそれももうすぐ終わると信じて私はここまで来たのだ。
「もうすぐ会えるかな、トレーナー」
その日は結局、漫画喫茶で過ごすことにした。
慣れない場所ではあったが長旅の疲れもあってか意外にもすぐに眠気が来てそのまま身をゆだねたのだった。

「誰だ？君は」
トレーナー！私だよ。ナリタタイシンだよ
「トレーナー？知らないな。それに君のこともわからない。

人違いではありませんか？
それでは　」
待ってよ、トレーナー
行かないで…

「夢か…」
普段と違う環境のせいか変な夢を見てしまった。
私はトレーナーに会いたい。
会ってもう一度話がしたい。
けれどトレーナーの方は？
もう会いたくないから姿を消したのではないのか
そう思うと途端にトレーナーと再び会うことが怖い
けれど私はそれでも…

そのころトレーナーは何をしているのか
はるばる元担当ウマ娘が近くに来ているとはつゆほど思わず、
毎日を怠惰に過ごしていた。

トレーナー時代の貯金が十分にあったこと、
また実家にしばらく滞在する許可が親から降りたことが大きかっただろう。
はるばる東京に出ていった息子が北海道の実家に出戻ってきた際には親から驚かれはしたが、人間慣れるものであっという間にニートが生まれたのだった。
家にいても特にやることもないので近所を散歩でもしようかと思い立ち、家を出たのが昼前頃だった。
歩くのに少々疲れたので公園のベンチで休むことにしたのだった。

「着いた。」
私は住所にある場所の近くの公園まで来ていた。
住所にある場所はもう少し先だが、一旦ここらへんで現在の位置関係を整理してから目的地に向かおうと考えていた。
平日のちょうど昼頃なので公園にいる人は少なく、
小さな子供を連れた親子連れが数組いる程度だ。
だからこそベンチに腰を下ろしているトレーナーの姿を見つけるのは簡単だった。
「っ、見つけた」
私はそのままトレーナの近くまで移動した。

彼の目の前まで来てもトレーナは私に気づかない。
耳にイヤホンを差し、スマホの画面に夢中なようだ。
トレーナの方を軽くたたきこちらの存在をアピールする。
「ねえ、トレーナ。迎えに来たよ」
――――――――――――――――――――――――
最近は運動不足で少し歩いただけですぐ疲れてしまう。
なのでいつもの散歩コースの途中にある公園のベンチで少し休むことにした。
平日の昼前ということもあって、公園にいる人はだいぶ少ない。
これだったら、真昼間からベンチに佇む男がいたとしても人目につくこともないだろう。
ベンチに腰を下ろして音が周りに漏れないようにイヤホンを取り出して日課のソシャゲを楽しんでいる最中のことだった。
先ほど確認したときには自分の周りに人はいなかったはずだ。
少し離れた位置に親子連れがいた程度だったが、
どうやら自分の目の前だろうか、人が来ている気配を感じる。
何か自分に用があるのだろうか。
ただ目の前の存在を確認するのは少し勇気がいることだった。

どうしたものかと、スマホをいじりながら考えていると、
目の間のその存在が肩をたたいてきて、話しかけてきた。
「ねえトレーナ迎えに来たよ」
そこには本来ならばここにいるはずのない女の子が立っていたことに驚きを隠せなかった。

――――――――――――――――――――――――――――――
トレーナがそこにいた。
やった！嬉しい
はやる気持ちを抑えてまずは平常心だ。
そこにいた彼は私の知っているトレーナ姿とほとんど変わっていなかった
「久しぶりだね。タイシン。急に目の前にいるからほんとに驚いたよ」
そう告げる彼は確かに驚いた表情をしていたが、
ただ私に向けられるその表情はかつてのものと一緒だった。
正直ホッとした。
私は嫌われてしまったからトレーナはいなくなってしまったのではないか。
そう考えてとても不安だった。
「ねえ、トレーナ。なんで急にいなくなったの？

なんで連絡しても無視したの？
なんで私を置いて行っちゃったの？」
嫌われていないのならどうしてトレーナはいなくなったのか
いきなりこんなに詰められて迷惑だ、ということはわかってる。
けれどどうしてもそれが気になってしまった。
「連絡？あー…。俺スマホ落としちゃってさ。
連絡先も消えちゃって、
連絡の方は確認できてなくてな。ごめんな」
いやいやいや
私がどんな思いでここまで来たと思っているんだこの人は
けど、、、だったら…
トレーナーと二人でまたあの頃に戻ることだってできるのではないか
「ねえ、トレーナー。
帰ろう？トレセン学園に。
それでまた私にいろいろ教えてよ
私と一緒にまた一緒に頑張ろうよ」
「タイシンは強いな。

それにＧＩレース見たよ。
俺がいなくなった後も頑張ってるんだな
すごいよタイシンは」
「だったら！」
「けど、俺はトレーナーを辞めたんだ。それはもう聞いてるんだろ？
だからトレセン学園には帰らない。
それに俺の都合で急に辞めたんだ、学園や君にもだいぶ迷惑が掛かったと思う。」
「そんなことは…
それに理事長だって戻って来いって言ってるし」
「へ～。理事長は優しいな
こんな俺にすらまた戻ってこいだなんて。
けどそんなこと理事長や君が許可しても周りが許さないよ」
「それは…」
「君とのトレーナーとウマ娘としての関係を途中で投げ出した無責任な俺のことはもう忘れてほしい。
君はこれからもトレセン学園で新しいトレーナーと一緒に頑張って欲しい
陰ながら応援しているよ。」

そう言って彼はベンチを立ち上がった。
「じゃあねタイシン」
彼は私に別れを告げそのままその場を離れようと歩き出した。
待って！
待ってよ！
今、彼をこのまま行かせてしまったらもう二度と彼と離れ離れになってしまうような
私はここに何のために来たのか
何のために…
トレーナーとまた担当ウマ娘としての日々を取り戻すため？
違う！と言ったらウソになるが、本質は違う気がする
何のために学園の授業やトレーニングを投げ出してここまで来たのか
なぜ毎日が楽しくなくなったのか
なぜレースに勝っても毎日が退屈になったのか
私は…
「…たいの」
私の口から搾り出たそれは紛れもない私の本心だった。
「一緒にいたいの…」

私は歩き出した彼を追いかけそして後ろから抱きついた
「タイシン?!どうした?!」
「行かないで…トレーナー」
「だからな、俺はもうトレーナーの仕事はやらないって…」
「違う、私はもうトレーナーと離れたくない
トレーナーがもうトレセン学園に戻らないって言うんだったら私がここに残る！
私はあなたともう離れたくない!!」
「おいおいおい…
トレセン学園にもう戻らないって、それはだめだ！
タイシンは俺と違ってこんなところにいていいウマ娘じゃないだろ！
君には才能がある！素質がある！これからもまだまだウマ娘として活躍していくはずだ！
一番近くで見てきたから分かる。
そんな君がこんなところでましてや俺なんかを理由に残るだなんて…」
それくらいは私だって理解はしてる
けどねトレーナーそうじゃないんだ
「ねえ、トレーナー。

私ねあなたがいなくなった後も結構頑張ったんだ
ＧＩレースだって勝ったし、けどねそれでもあなたとの毎日の方が楽しかった。
充実していた
満たされていた」
「いなくなって初めて私はあなたの大切さに気が付いた。
私はトレセン学園で勉強するより、トレーニングするより、友達といるよりも、
そしてレースで勝つよりも、
あなたが欲しい」、
「あなたと一緒にいたいの！これ以上言わさないでよ馬鹿…」
「タイシン…君は…」
「あなたは私のこと嫌い？」
「そんなことはない！がしかし…」
「だったらもう決めたから、あなたのこともう離さないから観念して」
「いやいやいやいやそういう訳にはいかないでしょ」
「なに？私じゃ不満ってこと？」
「そういう話ではなくて…」
「私はあなたと一緒にいるためだったら他には何もいらない。

もう向こうには帰らないから」
「一旦俺のうちで話そうか…タイシン」
「別に話したって結果は変わらないと思うけど…
家に案内してくれるって言うんだったらついてく」
「分かった。おいでタイシン。
それとそろそろ後ろに抱きついてるこの状況が恥ずかしいので、一旦離れようか」
「わかった」
そう言って私は抱きつくのをやめ、そのまま彼の空いている手を握った
「早く案内してよ」
もう彼のことを決して逃がさない。
彼を絶対にものにしてみせる。
だって私は追い込みに関しては誰にだって負けないんだから。
ーー
「という脚本で出版社に持ち込もうと考えているのですが、どうですかトレーナーさん」
「早く映画化してどうぞ」
「タイシンさんとトレーナーさんの物語ヒットすると思うんだけどなぁ」
「間違いない」

今日もアグネスデジタルの妄想は止まらない

タキオンさんにドッキリを仕掛けたい

「以前、理事長からウマ娘さんたちへのドッキリについてアイデアを打診されていましたが、ちなみにですけど何かいい案ありますか。トレーナーさん」
「あー、ドッキリの話ね。すっかり忘れてたよ。そうだよな…理事長公認だし何かせっかくだし仕掛けていきたいよなあ」
「案ってわけではないんだけど、デジタル的にもしされたら驚きそうだなって思えることは何かないの？内容が良い、悪いは別にして」
「デジたん的にですか？そうですね…。
　デジたんに限らずだと思うのですがそのウマ娘さんを単に驚かすだけよりも、
　その担当のトレーナーさんが一枚かんでくれていた方がより良い反応が得られそうな気がします。」
「担当のトレーナーか。でもなんで担当のトレーナーなんだ？例えばそのウマ娘の周りの人だったら誰でもいいんじゃないのか？」
「そうですね。もちろんやるドッキリの内容次第ではそれでもいいんですけど、
　今回デジたんがやってみたいドッキリはできれば担当のトレーナーさんに協力して

もらいたいものなんですよね」
「ほお…、してその内容というのは」
「はい、内容は「トレーナーが突然の事故で死んでしまったドッキリ」っていうものをふと考えたんですけど」
「なるほど。ふと考えた内容にしてはだいぶ攻めてるけど個人的にもすごく気になってきたなそれ」
「そうでしょう！トレーナーさん。まああとは「トレーナー辞めるドッキリ」とかですかね
　いま思いつく限りだと」
「どれも湿度高めの娘に仕掛けていきたいな。ナリタタイシンとかトウカイテイオーとか」
「個人的には何ですけどタキオンさんとかにも仕掛けてみたら面白そうだなと思ってたりします。」
「タキオンか！いいなそれ。」
「わかりますかトレーナーさん。そうなんです！タキオンさんって意外とだらしないことが多くて、
　まあ、それもタキオンさんの魅力の一つなんですけど、

トレーナーさんに食事とか身の回りの世話の部分まで実は任せているくらいには信頼している関係性なんです。
そんなさなかそんな彼女の当たり前を支えていたトレーナーさんを失ったときの彼女の反応が見てみたいというのがまず一つ。
そんでもってもちろんネタ晴らしもするのですがその後により一層トレーナーさんに対する独占力が強くなったタキオンさんが、よりべったりとトレーナーとしてほしい。
とデジたんは考えています。」
「一度失って、もしくは手元を離れられてもう絶対に離さないっていう深層心理の想いからくる行動ってやつだな」
「そうですそうです。そんでトレーナーが少しでも他の異性と仲よくしようものなら、めちゃくちゃすねちゃうタキオンさんが見たい！」
「深層心理では絶対に離さないって想いがあるからこそ他の異性と仲良くしている状況がどうしても不快に感じてしまうんだな」
「自分でもなんでそんなに不快な気持ちになっているのかが理解できなくて。
そこからのヤンデレルート派閥と純愛ルートで意見が分かれると思うのですが
トレーナーさん的にはどちらですか？」

「うーん、個人的にはなあ。どっちだろう。どちらも見てみたいし捨てがたいけどヤンデレルートかなあ」
「そんで薬とか若しくはウマ娘の力をフル活用して強制的にトレーナーを手篭めにしてほしいな」
「いいですね薬。媚薬とかどうです、媚薬」

「用意した媚薬を自分で間違って飲んでしまうタキオンありだと思います。」
「おっちょこちょいタキオンさんいいですね」
タキオンの作る薬には無限の可能性がある。
この案を今後のドッキリに生かせるかもしれないと

スマホゲームでアグネスデジタルをお迎えする話

「そういえばトレーナーさんってスマホゲームのウマ娘プリティーダービーやってるんですか?」
「やってるよ。そういえば今日はデジタルの実装日だったね」
「その…、こんなこと聞くのはあれなんですけど、、、
　デジたんのことひいてくれたりしてくださってると嬉しいなぁ、なんて…」
「無論、天井にてお迎え完了しておりますデジタル殿」
「えっ!お迎えてくださったんですね!!
　じゃなくて…トレーナーさんに引いてもらえたことはもちろん嬉しいですけど…
　天井まで引いちゃ他のウマ娘さんたちのお迎えにジュエルが足りなくなっちゃうじゃないですか…
　よかったんですか?デジたんなんかにそんなにジュエルをつぎ込んでしまって」
「まあ、天井まで来てくれなかったのは残念だったけど、、、
　元々、最悪天井まで引く気でいたし良いかなって」
「デジたんのために天井まで覚悟していたですと!!??

それはもしかすると！もしかしなくても!!デジたんのガチファンってことですか!!??
えっと…その、、尻尾の毛とかいりますかトレーナーさん」
「ガチファンのことを何だと思ってるんだデジタルは…まあもらうけど」
「んっふっふ。それでこそデジたんのトレーナーさんです。
ウマ娘さんたちのガチファンたるものその一部でも欲しいと願うのは必然!!
はいっ！この毛のことをデジたんだと思って大事にしてください」
「半分くらい冗談で言っていたつもりだったんだけど、
まあお守りにでもしておくよ。」
「ひえええ～、お守りだなんてそんな大それた物に使わないでくださいよ～
デジたんも少し悪ノリしちゃったのは謝りますから～勘弁してください」
「ハハハッ！そうだな。悪い、悪いデジタルの反応見てたら楽しくてさ」
「んもう、トレーナーさんは意地悪ですね。それで先ほど渡した、その…私の尻尾の毛の方は…」
「ん？」
「え？」
「まあ、尻尾の件は一先ず置いておいて、デジタルの方のウマ娘のアカウントはどんな感じなんだ？」

「別に尻尾の毛くらいだったらトレーナーさんにだったらいくらでも差し上げるのに…
　えっと、それでデジたんのウマ娘のアカウントの話でしたね。
　すこーーしだけ人に見せるのは恥ずかしいんですけど笑ったりしません？」
「四の五の言わずに早く見せなさいデジタル君」
「ひえええ～横暴ですよ～～トレーナーさん
　はい、これがデジたんのアカウントなんですけど」
「それでは拝借させて頂きます、デジタル殿」
「デジタルのことだから何となく予想してたけど、育成ウマ娘は全員フル覚醒フル強化済みか…
　サポートカードの方は…当然のように完凸フル強化されてますね…
　　あれ？」
「どうかしましたか、トレーナーさん」
「いや、サポートカードの方で未強化のカードがあるなあって思ったらこれデジタルのカードじゃん！」
「デジたんがウマ娘さんたちの成長に関与するのはデジたんのポリシーに反しますので。
　あくまで私は観測者としてウマ娘さんたちをファンとして応援したいのです!!」

「徹底してるね、いいね」
「ところで」
「？なんですか？」
「この君のアカウントからはそれはそれはウマ娘愛を感じる」
「そうですとも！いくらかけたと思ってるんですか！」
「そこですよ、デジタル君。僕が聞きたいところは」
「デジタルはレースで勝った賞金ちなみにあとどれくらい残ってるんだい？」
「残ってないです…」
「え？」
「びた一文残ってないです…
　この前のパワーライスちゃんでついにそこをつきました…」
「ん？」
「それはそうとデジたん用事を思い出したので失礼しますね」
「おいおいおい！待って、待ちなさい!!
　って、速っ。なんて足だこの野郎」
「おーーーーい!!
　もうしょうがないから今度のＧＩレースで勝ってライブの費用作るぞーーー！

それでいいかーーーーー？」

「はーーーーーーーい。トレーナーさん！それでいきましょう」

走り去っていくデジタルを見送り次のレースの予定を考えることにしたのだった。

やめてスペちゃん！アグネスデジタルのライフはもう０よ！

今日もウマ娘さんたちが輝いていますねえ～
そんなことを考えながらアグネスデジタルは学園内をいつものように散策していた。
ついつい考えていることが口に出てしまう。
トレーナーさんからの指摘で最近そのことに気が付いた。
それこそ他の人には聞かせられないようなことだって漏れていたとかなんとか。
危なかった…
誰かに聞かれていたらそれこそデジたんは羞恥で死んでしまうかもしれない…
あーー良かった。トレーナーさんにご指摘いただけてほんとに助かりました～
「ふう、、 少し疲れたので休憩でもしますかね」
そう私は考え近くの椅子に腰かけることにした。
「あ～^ ^ 眼福ですね～やっぱりトレセン学園は最高です～」
ああ…やっぱりウマ娘さんたちは見ているだけで癒されますね
このあふれ出そうな思いを次の即売会で同士たちに配布しよう！

即売会で出す次の同人誌の構想を練っていると、
「あっデジタルさん！私スペシャルウィークっていいます！
今、お隣座っても大丈夫ですか？」
す!!!???
スペシャルウィークさん!!
どうして!!
??!!なんで??!!
「は、はいいいい。だだ大丈夫です」
いったいデジたんにスペシャルウィークさんが何の用だろうか
ドキドキするなぁ
なんたってあのスペシャルウィークさんだ！
それにしてもやっぱりスペシャルウィークさんは可愛いなぁ…
レースでご一緒したことはなかったけど、こうして近くで見るとなんて尊いんだ…
あ～今日はなんていい日なんだ
そんなことを考えていた矢先だった。
「あの、デジタルさんっ。
ずっと聞きたいことがあったんですけど……。」
デジたんに聞きたいこと？

なんだって答えますとも!!
「はわわわっ、あたくしめにどんな質問が!?」
「どんなことだって答えます!!
何だって仰って下さいまし〜!!」
スペシャルウィークさんがデジたんに興味を持ってくださるなんて、、
なんてデジたんは幸運なんだろうか!!
基本的には観葉植物のように陰から応援するのがデジたんのポリシーですが、
こうしてウマ娘さんから反応があるっていうのも嬉しいものですね〜
「ありがとうございます!
では、えっと……。」
どんときてくださいまし!!!
「「次の新刊」って何のことですか!?」
ＷＨＡＴ!!?
今なんと??!!!
次の新刊といわれたのか??
どうしてスペシャルウィークさんがそのことを知って??!!
「すごく楽しそうにしながら「次のウマ娘ちゃんも新刊はこれだ〜!」

って仰っていたので、気になって……!」
ひぃぃ!ば、バカな…!
いやっまだだ…
まだ巻き返せる…
嘘をつくわけではない。
ただ、新刊の内容をやんわりとオブラートに包んで上手に伝えればいいだけだ
具体的なタイトルが知られてさえいなければまだ巻き返せる!
いける!!
「「秘密の併走」とか、「尻尾のキモチ」とか、もしかして、流行りの漫画とかですか!?
それともトレーニングの本だったり?」
終わった…
もうやめてください～
デジたんは恥ずかしさのあまりもうライフが…
やめっもう許して…
「ぜひ教えてください～!!」
ひえええええ～
自身の同人誌をウマ娘さんに説明するだなんてどんな罰ゲームですか

「許してください～!!」

「ふう…」
トレーナー室での作業がひと段落ついて散歩でもしよう
そう思い立ち部屋を後にした。
トレセン学園は賑やかで退屈しないな
少し歩いていると離れた位置にデジタルが見えた。
またその隣には、あれはスペシャルウィークだろうか？
珍しい組み合わせだなと
どんなことを話しているのか。
ほんの出来心で聞いてみることにした。
近くによって話を聞いてみたがすぐにその行為を後悔した。
「あの、デジタルさんっ。
ずっと聞きたいことがあったんですけど……。」
デジタルに聞きたいことか
それは僕も気になるな
「はわわわっ、あたくしめにどんな質問が!?」

「どんなことだって答えます!!
何だって仰って下さいまし～!!」
デジタルらしい返答だな…
ウマ娘からの質問だったらほんとにデジタルだったらなんでも答えてしまいそうだな笑
「ありがとうございます!
では、えっと……。」
「「次の新刊」って何のことですか!?」
うわっ…、え?
まあ、新刊といっても何かの漫画のことかもな
「すごく楽しそうにしながら「次のウマ娘ちゃんも新刊はこれだ～!」
って仰っていたので、気になって……!」
あ…デジタルさんやらかしてますね
あれほど外では妄想を口に出すのはほどほどにしておけと…
デジタルの焦った様子を見ているとこっちも気恥ずかしくなってきた
その新刊僕も手伝ったやつなんですけど…
おや?デジタルがまだあきらめてなさそうな雰囲気だ

確かに新刊ってだけならまだいくらでもごまかしようがあるしな
「「秘密の併走」とか、「尻尾のキモチ」とか、もしかして、流行りの漫画とかですか!?
それともトレーニングの本だったり?」
ひえええええ～
自身の同人誌を自分の口から説明するだなんてどんな罰ゲームだ…
しどろもどろになるデジタルは見ていてこっちもキツイっす
あの場にいるのが自分でなくて良かった～
「ぜひ教えてください～!!」
「許してください～!!」
デジタルには申し訳ないが二人にばれないうちにさっさと離脱しよう
そう考えた直後だった。
ｐｉｐｉｐｉｐｉｐｉｐｉｐｉｐｉｐｉｐｉｐｉｐｉｐｉ
マナーモードをオフにし忘れていた自身の携帯がけたたましく鳴り響く
まずい!?
「あれ?そこにだれかいるんですか?
あっ!デジタルさんのトレーナーさんじゃないですか～
ぜひいっしょにこっちで話しましょうよ!」

「いや、、、その、いまは時間がないかなあ、、なんて」
「!!そんなこと言わないでくださいまし!
トレーナーさん!!
ぜひ一緒にお話しましょう!
デジたんとスペシャルウィークさんと三人で!!」
逃げられなかった。
それからは純粋なスペシャルウィークちゃんの質問がとてもつらかった。
ごめんな。スペシャルウィークちゃん
僕らが書いてる新刊っていうのは君が思うような純粋なものではないんだ…

ウマ娘職人、アグネスデジタルの朝は早い

尋ね人はとりあえずアグネスデジタルに聞いとけ
トレセン学園にはそんな逸話がある。
我々はその真偽を確かめるべくトレセン学園へと向かった。
「ウマ娘いるところにデジタルあり」
そんな言葉がトレセン学園ではまことしやかに噂されている
曰く、
トレセン学園で友達と写真を撮るとそのどこかに必ず彼女が映りこんでいる
曰く、
恋バナあるところには必ずどこかに彼女あり
曰く、
レース後のウイニングライブではいつ見ても最前列にその姿がある
などなど、トレセン学園ではそんな彼女に関する様々なうわさが後を絶たない。
この「ウマ娘いるところにデジタルあり」といった噂も、もしかしたらそうした噂のどれかがいつの間にか飛躍して大げさになったものなのかもしれない。

我々は今回そんな噂の彼女、アグネスデジタルの一日に密着してみることにした。
彼女の朝は早い。
「朝練のウマ娘さんたちの姿を見過ごすわけにはいきませんから」
一人一人丁寧に朝練を普段行っているウマ娘たちのリストを作成していく。
Q．自身の練習もあるのに他の方の練習まで見るのは大変なのではないか？
そんな我々の疑問に彼女は今回答えてくれた。
「確かに自分の普段の練習と並行して他のウマ娘さんたちの練習を追うのは時間がかかる
ことです。
けどね、好きで始めたこの追っかけも今ではすっかり日課となってしまいましてね
作業量は確かに増えますが、そこは長年培った経験でカバーしています」
そう語る彼女の目からは、ウマ娘たちのことについては常に全力であるという意志を強く感じた。
彼女の日課に付き合ううちに時刻はもうすぐホームルームの開始時間に差し掛かろうとしていた。
Q．このままだとホームルームに遅刻してしまうのでは。
そんな我々の疑問に彼女は答えてくれた。

「そうですね…。自分でも時間の方はだいぶギリギリを攻めていると思います。
けどね、この時間だからこそ見ることのできるウマ娘さんたちの焦った表情もございま
して…
それを見るためだったら遅刻のリスクの一つや二つ余裕ですよ」
「とはいえ…そろそろデジタルもいかないとやばそうです。
遅刻のせいでウマ娘さんたちとの時間が減るのはＮＧなので、お先に失礼しますね」
そう我々に言い残し、彼女は昇降口へと走り去っていった。
結局我々が後から教室にたどり着いたころには彼女は何喰わね顔で自身の席に着席していた。
あそこからホームルームに間に合わせるのは流石ＧＩウマ娘といったところだろう。
彼女のレース以外でウマ娘としての能力を活用しているのは見ていて爽快である。
授業中の彼女はとても幸せそうだった。
我々取材班は当初その理由が分からなかったが、ついに一つの仮説を見出した。
もしかするとアグネスデジタルというウマ娘にとってはウマ娘の方々と同じ空間にいるというだけで満たされているのだと。
幸せそうな彼女の様子はそのまま放課後にまで続いたのだった。

放課後我々と行動を共にしてくれた彼女の目は絶えず何かを追っていた。
「ぐふふふふ、たまりません」
Q　何をみているのですか？
「そりゃあ勿論、ウマ娘ちゃんたちに決まってるでしょう！
ほらっ、あそこにも！
ああ…やっぱりここは楽園ですよ～」
今日はいつも以上にウマ娘の姿が見ることができて我々は幸運であると彼女は語る。
放課後の彼女の予定はこうしてトレセン学園中を練り歩くことが日課とのこと。
話を聞くともはやどの時間にどこでどのウマ娘がいるのかまで大まかに把握しているらしい。
これがあの「尋ね人はとりあえずアグネスデジタルに聞いとけ」といわれる噂の所以だろうか？
試しに彼女と同室であるというアグネスタキオンの放課後の居場所を聞いることにした。
我々の予想としてはトレーナー室か彼女の実験室のどちらかである
そのことを彼女に伝えると少し考えるそぶりを見せたが、
その答えは我々の予想とは異なったものだった。

「ん～そうですね。いつもだったら確かにトレーナー室か実験室のどちらかだと思います。

けど今日に限ってはもしかすると生徒会室かもしれないです。」

Q.　それはなぜ？

「少し前なんですけど、エアグルーヴさんが鬼の形相で誰かを探しているのを見たんです

けど、

基本的に普段からエアグルーヴさんを怒らせる人ってタキオンさんかゴールドシップさ

んのことが多いので今回もそんな感じかなと思ったりしています」

その言葉通りアグネスタキオンは生徒会室に呼び出されていた。彼女のトレーナーと一緒に呼ばれたようだった。

詳しい内容まではわからなかったが、そんなイレギュラーな状況までも当てきるアグネスデジタルの考察力には驚かされた。

Q.　もしかしてたまたま呼び出されているところを見ていたのか？

「まさか、四六時中ウマ娘ちゃんたちのこと考えて毎日トレセン学園で彼女たちを見守っ

てるだけです。
あたったのはまぐれですよ～」
彼女はそう謙遜していたが彼女の推理力は本物だった。
毎日朝からウマ娘のことを考え続けている彼女だからできる芸当だろう。

今回は我々からの頼みで彼女のトレーニングに同行させていただくことになった。
Q.　その手に持っている巨大なおにぎりはトレーニングか何かに使われるのですか？
「おにぎりをトレーニングに？まさか
ウマ娘ちゃんたちのトレーニングをおかずに食べているだけですよ」
我々がおかしいのだろうか
そう思い、途中から合流した彼女のトレーナーに助け舟を求めてみることにした。
「ああ…デジタルの白米ですか…
不思議なことにね、白米を食べてからだとめちゃくちゃ調子がいいんですよ
訳が分からないでしょう？
僕ですか？さすがにあの量は食べれませんよ。
おかずにするといっても普通のおにぎりサイズが限界です笑」

そういう彼も双眼鏡を片手におにぎりを頬張っていた。
アグネスデジタルもそのトレーナーも同類のようだ。

媚薬とアグネスタキオン

しまった。
私としたことが間違えてトレーナー君に渡す用の方を飲んでしまった。
何を隠そう飲んでしまった方には私特性のとある薬が入っている。
それを飲んだトレーナー君の反応をぜひとも観察したかったのだが…
ああ…やばいもう効き始めてきた。
いやまあ、即効性の媚薬を作ったつもりだったからこれはこれで成功なんだが。
「どうした?タキオン。顔が赤いぞ」
そう言ってトレーナー君が私の顔を覗き込んでくる。
「い、いや、な、何でもないんだよ」
頭が回らない。
それに目の前の彼がとてもかっこよく見えてきた。
っと、危ない…理性まで失うと今の私が何をしでかすかわからん
「なあ。ほんとに大丈夫か?具合が悪いなら保健室まで付き添うぞ」
ああ…なんて彼は優しいんだ。

私の力があれば彼をこのまま押し倒して、その先までだって…
っ、やばい！ほんとにやばい！
思考がどんどんおかしくなってる。
このままここにいるとほんとにやばそうだ。
「すまない。トレーナー君呼び出しておいて申し訳ないが少し急用を思い出したので
私は少し席を外すよ」
私は一刻も早くその場を離れる必要があると
その思いですぐさま行動に移そうとした。
「待って。タキオン。タキオンのトレーナーとしてそんな状態の君を行かせるわけにはいかない」
そういうと、そのまま部屋を後にしようとした私の腕をつかんで
彼の方へ引っ張ろうとしてきた。
いくら朦朧としていても、さすがにウマ娘の力で負けるとも思えない
このまま部屋を出ていこうとそう考え、
彼の手が私の腕に触れた時だった。
「ひゃん／／／」
????!!!

一瞬の静寂
お互いに時間が停止した。
どうなっているんだ！やばい
少しだけ彼に触られただけであんなにも敏感になっているなんて
「す、すまん。タキオン、その急に触ってしまって。
おっ、驚いちゃったよな、ハハハ…」
「い、いや。大丈夫だ。ほんとに気にしないでくれ」
気まずい、
それにそろそろ私も我慢が限界だ
もう本当にまずい
そんなことを考え気まずいながらも早く部屋を出ていこう
そう考えた。
ただ先ほどよりも薬が回った私はこともあろうに彼の方によろめき
胸に飛び込むような形で倒れこんでしまった。
「ほんとに大丈夫か？タキオン。
それに顔だってさっきよりも赤くなってる…」
そう言って彼はまた私の顔を覗き込んできた。

さっきと違うのはより密着している点だろう。
もう我慢の限界だ。
私の心音が彼に聞こえていても不思議ではないくらい心臓が脈打っているのがわかる。
っ、だめだだめだだめだ。
私は彼が媚薬を飲んだ反応が見たかったのであって私自身がこんな醜態をさらすのは想定外だ。
けど…
このまま…
もし自分の気持ちに正直になれたら…
そうだ…このまま、思うがままに
「お、おい?タキオンさん?少し力が強いような」
「トレーナー君は何も気にしないでくれ。
ここから先は私の自己満足だから」
「自己満足?何を言って
うわっ!おーいタキオンさーん
重くはないけどこのままだと身動きがとれないよ」

トレーナーをそのまま押し倒した私にもう理性と呼べるものは残っていなかった。
ああ…これでやっと彼のことが手に入る。
私の頭はそんなことでいっぱいだった。
「大好きだよトレーナー」
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
「おーい、デジタル?そろそろ起きろー」
「はっ?!あれ?タキオンさんとそのトレーナーさんはどこに?」
「いや、、、その二人はここにはいないけど」
「それじゃあ…今の二人のこれからのシーンはどうなってしまうんですか!!!」
「寝ぼけてるな、顔でも洗ってくれば?」
「そんな〜。あの後が一番デジたんは見たかったのに…
なんで起こしちゃうんですか!!!馬鹿〜」
「悪かったって。でもそこまで言うほどのデジタルの夢はどんなものだったか気になるな」
「だめです〜。もうこの夢の内容は教えてあげませんー
思い出すだけでよだれが…」
「そんなに良かったのか?!おしえてくれよ〜」

通常運転なアグネスデジタルだった。

オタクに優しいウマ娘ちゃんは実在するのか

「オタクに優しいギャル系ウマ娘ちゃんは存在する!!」
「なに言ってるんすかトレーナーさん」
「いや…いてほしいなって思って」
「まあ、それに関しては同意しますけど…」
「けど「オタク」って言葉あるじゃないですか」
「ん?そうだな。それがどうかしたか」
「「オタク」って言葉はおそらくギャルの方からすれば蔑称ですよ
　オタクっていうのは自分の好きなものや興味のあることでしかコミュニケーションが取れない人達だと思われている気がしますよ」
「…そんな気がしてきた」
「そんなコミュニケーション能力に難のある人種に対して優しいなんてそんなの我々のような同類か聖人くらいですよ?」
「珍しく今回は否定的だね。何かこの「オタクに優しいギャル」っていうものに思うとこ

ろでもあるのかい？」
「そうですね…デジたんにもそんな夢を見ていた時期もあったってことです…
そんで色々ありましたね。
まあ、デジたんの場合はギャルどころかオタクそのものに厳しい世界でしたね。
ハハハ…」
「うーん。そうだよなあ。
未だにオタクってことで陰キャ扱いしてくる人もいるし僕らみたいのには厳しい世の中だね」
「そうなんですよね
ん？あー。
ちょっとデジたんお花を摘んできたくなったので席を外しますね」
「りょーかい」
そういうとデジタルは席を立ち部屋を後にして行った。

「少し否定気味過ぎましたかね」
用を足している最中私はそんなことを考えていた。
「けど、なあオタクに優しいギャルなんてそんなツチノコみたいな存在いるなんてとて

も思えないしな…

ましてや、そこにさらにウマ娘ちゃんでそんな人なんてとてもじゃないけど…」

用を済まして手を洗い私はトイレの外に出た。その時だった。

「あっ！デジたんじゃーん！チョリーッス！

こんな所で会うなんてバイブスアゲアゲ～」

「あっあっ、ダイタクヘリオスしゃん…

そ、そうですね。こんなところで奇遇ですね」

（こんなところでウマ娘ちゃんと会えるだなんて今日はついてますね）

「相変わらず面白いんね、デジたん

それに私のことはヘリオスでいいよ～」

「ヘリオスしゃん…に話しかけてもらえるなんてこ、光栄です～

それでデジタルに何か用でしゅか…」

「あ～！この前のデジたんのレース超やばたにえんでまじ卍だったから今本人に会えてたんあげって感じ！」

「デジタルのレースをヘリオスさんが見てくださったのですか!!

光栄すぎて昇天してしましてしまいそうです～」

ヘリオスさんしゅきしゅきしゅき～～

ありがとうございますありがとうございます
デジたんその一言だけで一生食っていけますよ
「デジたんのレースは見てるとマジでバイブス上がるし
マジでデジたんしか勝たんって感じ」
「そんなデジタルなんかのレースをそんなにも…
ヘリオスさんのレースもとても楽しませてもらってます〜」
「え〜!よいちょまる〜!まじ感謝〜
デジたんってめちゃくちゃいいやつじゃーん」
「とりま、連絡先登録しておくっしょ!
デジたんはウマスタとかやってる?」
「は、はい〜。ウマスタグラムもウマッターもその他もろもろすべてやらせていただいておりまする。」
「オッケー、じゃあラインの交換してっと。
って、あれ?」
「ど、どうかなさいましたでしょうか、」
「デジたんってもしかしてこのアカウントの人?」
「はい〜そうですとも。僭越ながらデジタル前々からフォローの方させていただいてお

ります」
「え～どんなレースの時も毎回応援メッセくれるこの神フォロワーって、デジたんだったの??!!
まじ驚きモモノキなんだけど、ほんとありがと～マジで感謝しかないわ」

「いえいえ…ウマ娘ちゃんの活躍を応援するのはファンとして当然のたしなみです。
むしろデジタルの方がヘリオスさんに励まされてるっていうか
存在だけで幸せっていうか…
この気持ちを表せるだけの語彙力を持ち合わせていない自身の不甲斐なさを呪ってしまいたです～」
「って急に変なこと言いだしてすいません…
とにかくその、デジタルもヘリオスさんのこと一生応援してるっていうかずっとファンです!!」
「マジで!!ありがとデジたん～
自分の好きなことに全力なそのデジたんの姿勢私も尊敬するし見習うわ～」
「そ、そんなことは…」
「いやいやいや、十分デジたんがやってることは凄いことだって！

それにデジたんの応援メッセで私何度も元気もらったし、
今度のまたいろいろ教えてよ！」
「えっ！は、はい。デジタルでよければぜひともお話おねがいいたしまする」
「あはははは、それじゃあ私はもう行くね。ラインの方でまたメッセの方送っとくわ～
それじゃあバイバイ～」

「お帰りデジタル、お茶でも飲む？」
「…した」
「え？」
「オタクに優しいウマ娘ちゃんギャルいました…」
「いやいやそんな急にどうした、
あっ、もしかしてさっきの話で気を使ってくれてる？
ハハハハハ、大丈夫だって。
僕としてもいたらいいなあ～程度の願望だったからさ」
「トレーナーさん、いたんですよ…
ああ…やっぱりウマ娘ちゃんは最高です～あ^^ しゅき～、バタリ」

「あれ？おーいデジタルさん？
だめだ…なんて幸せそうな死に顔で死んでるんだ。」
デジタル尊死…

結婚式のご案内　ｆｒｏｍエイシンフラッシュ

「何書いてるんですか?トレーナーさん」
「これか?これは結婚式の招待状だね」
「へー招待状ってこんな感じなんですね
　ってこれエイシンフラッシュさんとそのトレーナーさんの結婚式じゃないですか！
あの
　２人結婚するんですか!!」
「そうなんだよな
　仲良いなと思ってはいたが卒業してからあっという間に結婚のご報告だうらやまけしか
　らん」
「デジたんもその結婚式是非行きたかったですー」
「いや?この招待状デジタルとそのトレーナー宛ってなってるからデジタルも参加できる

ぞ」
「ファ?!まじですか！
うま娘ちゃんの人生の晴れ舞台を私がこの目で見ることができるなんて感激です～
こんなところで油打ってる場合じゃないです!!
フラッシュさんの晴れ舞台で目立たないために今から空気に溶け込む練習しますよ
トレーナーさん！」

招待までしてもらってるんだからそこまでしなくても、、

「それはそうと担当のうま娘さんとそのトレーナーさんの結婚の話ってよく聞きますね」
「そうだなぁ～
今回に関してはエイシンフラッシュさんがだいぶ上手だったとデジたんは分析していま
すよ」
「というと？」
「担当が決まって結構最初の方から両親への紹介を済まして実は外堀を埋めに行ってい

たってデジたんの調べでわかっております」
「両親ってドイツにいるっていう？
すげぇな、」
差し切り体制整ってて草
「最初っから既成事実作りに行くあたり隙がなさすぎる」
「ドイツでは一髪うまぴょいしてからお付き合いを決めると聞いたことがあるが、
まさか、、、」
「今度の新刊のテーマはそれで行きましょうトレーナーさん!!」
「見た目はほんとに可愛い女の子だから
トレーナーも油断しきってるんだけど…」
「ついに好意が溢れ出ちゃったフラッシュさんから
襲われて、、、
最初は抵抗するんだけど
人がうま娘に勝てるわけないでしょう
ってなすすべなく押し倒されて欲しい」
「２人だけの時は実はＳ気があって、、、」
「導入はこれで行こうかデジタル氏」

「余談なんだけどフラッシュの衣装エチくね？」
「むむっそれはうま娘の私としても激しく同意せざるおえない」
「お胸が強調されていて、ほんとに好みです」
「トレーナーさん一回それで昇天して死にかけてましたもんね」
「映像越しで見るのと生で見るのでは破壊力が全然違うんだ!!
　おっぱいぷるんぷるん!!ってほんとに揺れてるんだ!!」
「ちょｗ辞めてくださいよ」
「すまんすまんｗつい声を荒げてしまった、、」
「ていうか情事の時って、、、
　それってうまぴょいのことやないかーーいｗｗｗ」
「もしかしなくても今転生すればフラッシュの子供になれる可能性が??!!」
「フラッシュママと合法的におっぱいを…」
「あー！それずるいですよ～デジたんも混ぜてくださいよ～」
「もちろんだともデジタル君、
　じゃあ僕が兄でデジタルが妹ね」
「夢のフラッシュママとの新生活が始まる!!
　わけないよなぁ…」

「こんな事エイシンフラッシュ本人やたずなさんに聞かれようものなら殺されちまう」
「はあ…」
「なあ…」
「なんですか？」
「トレーニングでもするか…」
「そうっすね」

ウマ娘ちゃんと同室になりたいという願望

「デジタルってさ」
「なんですか？」
「タキオンとたしか同室だったよね？」
「ん？え～そうですとも！
　タキオンさんと一緒の部屋でデジたんとしては毎日がパラダイスで、
　同室だからこそ見ることのできるタキオンさんのプライベートな一面を知ることができる役得には神に感謝しかありません～
　タキオンさんのプライベートを少しでも支えることができるルームメイトになることができたのはデジたんもう一生分の運を使ったと言っても過言ではありません!!
　けどですね！タキオンさんのもああ見えて実はだらしないところがありましてね！
　デジたんのポリシー的に基本的には私はうま娘ちゃん達は陰から見守るのがスタンスなんですけど
　できれば壁に溶け込む能力とか欲しいんですけど、
　タキオンさんだけは私人肌脱ぎましてタキオンさんの毎日がより良くなるように

洗濯物を畳ませて頂いてます～」
「お、おう…」
「いやっわかってるんですよ!!
お前、見守るとか言ってて関わりまくってんじゃん！って言われても返す言葉もないんですけど」
「最近はですね！デジたんの存在を相手に気づかれる事なくうま娘ちゃん達のサポートに徹することができるようになってきまして…」
「より近くでうま娘ちゃん達のを見ることが、応援することができてデジタンは毎日が天国ですよ～」
藪蛇だったか…
「ひえっとまんねぇなおい」
「んんっ、話が脱線しましたね
それでタキオンさんと同室なこのデジたんに何か聞きたいことでもあるんですか？」
「いや…個人的な願望でうま娘になりたいなあ…なんて思って、、
だからなんか一時的にウマ娘になれる薬でもタキオンだったら作ってくれないかなぁって」
「そんでいきなりそこまで接点のない自分から行くのも気が引けるから、

同室のデジタルにお願いしようかなぁって思って」
「トレーナーさんついにうま娘オタクが転じて自身がウマ娘になることにしたんですか!?」
「是非是非その話詳しく聞かせてください～
トレーナーさんがウマ娘になるのならば是非ともファン第一号はこのデジたんに立候補させていただきたい!!」
「なれるんだったらなってみたいさ、そりゃあ」
「けどまあそこまで色々考えてはいなくて、普段からデジタルの話聞いてたら自分もウマ娘ちゃん達と一緒に相部屋で暮らしたいなぁって」
「確かに!!ウマ娘ちゃんたちと同室で暮らすことができるのはこのトレセン学園の特大の魅力の一つですしね！」
「となるとトレーナーさんはうま娘ちゃん達と一緒の部屋で生活したいってことですか？」
「そうそう、
なんか上手くやれる薬でもタキオンだったら作れないかなぁって」
「もしよければですけど」
「どうした？」

「そちらの件デジたんと一緒に体験してみますか？」
「ん？どゆこと？」
「デジたんが外泊届出してトレーナーさんと一緒に生活すればその夢叶えられるんじゃないですか？」
「おいおいおいおい、ちょ待てよ」
「なーんて、いや～変なこと言ってごめんなさい～
　トレーナーさんもやっぱり他の可愛らしいうま娘ちゃん達と一緒の相部屋の方がいいですよね～」
「忘れてください、ハハハ…」
「…なんなら他のうま娘ちゃん達よりもよくよく考えたらデジタルと相部屋っていうのも楽しいかもな。」
「えっ？」
「それにデジタル程ウマ娘ちゃんの話で盛り上がれて、
　レースにもファン活動にも全力な変態で、
　そんなデジタルともし同室になれたらすごく楽しいかもな笑」
「それじゃあ、、それじゃあ!!
　トレーナーさんはデジたんと相部屋するの嫌ではないってことですか、、？」

「いやいやいやできることならお願いしたいくらいだよ笑
　とりあえず早くウマ娘になるためにタキオンに連絡取るべや」
「だったらいいじゃないですか！
　是非！是非是非やりましょうよ」
「ん？」
「今度外泊の申請してくるんで、その時はお部屋片付けといてくださいね!!
　夜中まで語り合いましょう」
「いいけど…大丈夫かなあ、、」
　ただ残念ながら外泊の許可は下りなかった。
　理由の方が不鮮明だったらしい、
「まあそうこともあるよデジタル、元気出して」
「そんなあ～
　チャンスだと思ったんだけどなぁ」
「ほら！商店街の温泉旅行券でも当ててさ
　それだったら基本的には許可が下りるって聞くし」
「とりあえず買い物でも行くべや」
「それにいいんですか？トレーナーさん

うま娘になるって言う話は、」
「ああ、よくよく考えたら僕がうま娘になっても結局やっぱりデジタルと一緒にいられるなら関係ないかなって
こんなにオタ話が出来て頼れる相手はデジタルくらいしかいないしね」
「はぅぅ〜／／／それは嬉しいこと言ってくれますね
一瞬プロポーズの言葉かと思ってしまいましたよ〜」
「やべえな、セクハラでトレーナー業廃業になっちゃうよ…
できれば先ほどの発言の方は第三者にはご内密に…」
「どうしてくれましょうかね〜」
「とりあえず今度一緒に商店街で、他のデートに来てるうま娘さんとトレーナーのウォッチングでもしに行くということでお許しを」
「それは！是非とも行きましょう!!」

小学生のキタちゃん「将来はトレーナーさんとけっこんします!」

キタちゃん「私!将来はトレーナーさんと結婚する!」

小学生だったキタちゃんことキタサンブラックからそんなことを言われたときは素直に嬉しかった。

感覚としては娘をもつ父親が、

「将来お父さんと結婚したい!」と言われるものと同じだろうか。

「ハハハ!楽しみにしているよキタちゃん」

娘を持ったことはないが、こういったことを言ってもらえるのは今後の励みにもなる。

トレーナーという存在が当時の彼女にとってはとても大きなものに感じたのだろう。

せいぜい嫌われないように現業のトレーナー業をしっかりとこなそう、

そんなことを考え毎日の仕事に没頭すること数年、

そんな会話をしたことなどすっかり忘れていたころついにキタちゃんがトレセン学

園中等部についに入学してきた。
「入学おめでとう！キタちゃん」
「えへへへ、無事に入学できてよかったです」
「やっぱり憧れのトウカイテイオーと同じ学校に通えるっていうのは嬉しいよね」
「はいっ！そうなんですよ。テイオーさんと一緒の学園に通えるっていうのは本当夢見たいですよ、けど…もっと嬉しいのは…」
「ほう…もっと嬉しいことがあるのか」
「トレーナーさんとこれからずっと一緒にいられるってことですかね！」
「お～嬉しいこと言ってくれるね～」
「嬉しいに決まってるじゃないですか!!私…ずっと待ち望んでたんですから」
「けどまあ、キタちゃん」
「なんですか！」
「トレセン学園だったら自分なんかよりもずっとすごいトレーナーたくさんいるし、キタちゃんだったら選り取り見取りだと思うよ」
「は？」
「えっ？」
「トレーナーさんは私のこと選んでくれないんですか」

「いや…その…」
「選んでくれないんですか?」
「僕なんかがトレーナーでいいんだったら全然いいんだけども…
　いいの?」
「トレーナーさんじゃなきゃ嫌ですよ」
「わかった。
　正式に担当トレーナーとウマ娘が決まるのはもう少し先だけどよろしく頼むよキタちゃ
　ん」
「もちろんですよ、トレーナーさん!」
「けど、、、どうして自分がいいの?
　その…言っちゃあなんだが、実績としてはその…めちゃくちゃ結果を出せているわけではないよ僕」
「そりゃあだって、将来の結婚相手ですもん!」
「あ～そういえばそんなこと昔言ってたね。なつかしいな」
「逃がしませんから」
「ん?ごめん聞き取れなかった。」

「いえ～これから楽しみだな～って思って」
「そうだな。トレセン学園は色々楽しいところだと思うから一緒に頑張ろうな」
「はい!!」
将来の結婚相手か～
そういえばそんな話もあったなあ
そんなキタちゃんももう中学生か…
ウマ娘としての本格化を経験してるキタちゃんは年齢以上に大人びて見えるから、
今まで通りだと緊張してしまうなあ
それにしても彼女はどこまで本気で言っているのだろうか…
好かれているというのは間違いなさそうなのはとても嬉しいことだが…
まあ中学生活の中でこういった話題が出ることも少なくなるだろう
流石に本気で言っている訳ないよな笑

時は流れキタちゃんは高校生になった。
高等部でも今まで同様に自分が彼女の担当トレーナーとして継続することになった。
「トレーナーさん
やっと私…トレーナーさんと結婚できます!!」

あれ～
あれれれ？
おかしいぞ
どうしてこうなった
「これからは婚約者としてずっと一緒にいれますね！」
「婚約者!?何のことでせうか…」
「ん？」
「あれ？」
「いやだな～トレーナーさん。私の結婚相手になってくれるってずっと前から言ってくれたじゃないですか～」
「そうですよね」
「いや…そうだったけなあ…なんて」
「そうですよね」
有無を言わさない彼女の圧に自分がもう逃げられないということを悟ってしまった。
「まさかとは思いますけど忘れただなんて言いませんよね？トレーナーさん」
「まさか…覚えてるよ、ハハハ…」
教え子に手を出したことがばれてトレーナーをクビになったら、キタちゃんのヒモに

なろうかな…

キタちゃん「トレーナーさんと結婚します」　～キタちゃんサイド

「私！将来はトレーナーさんと結婚する！」
　私は一目惚れが多い。
　トレーナーさんのことも正直一目惚れだった
　はじめはトレーナーさんに対して感じたこの思いが何なのか分からなかった。
　けれど今では分かる。
　私はトレーナーさんのことがだいすきです！
「ハハハ！楽しみにしているよキタちゃん」
　トレーナーさんも私との結婚を楽しみにしてくれてるんだ！
　えへへ～
　うれしいなあ
　早くトレセン学園に入って彼の担当ウマ娘になりたいなあ

そんなことを毎日のように考え、あっという間に数年が経過した。
ウマ娘としての本格化を経て私は無事にトレセン学園中等部へ入学することができた。
これで今後はもっと彼と一緒にいられる!!!
楽しみだなあ
トレセン学園での彼との生活を想うと楽しみで仕方がなかった。
「入学おめでとう!キタちゃん」
「えへへへ、無事に入学できてよかったです」
「やっぱり憧れのトウカイテイオーと同じ学校に通えるっていうのは嬉しいよね」
テイオーさんと一緒の学園っていうのももちろんうれしいです!!
けれどやっぱり本当にうれしいのは…
「はいっ!そうなんですよ。テイオーさんと一緒の学園に通えるっていうのは本当夢見たいですよ、けど…もっと嬉しいのは…」
「ほう…もっと嬉しいことがあるのか」
「トレーナーさんとこれからずっと一緒にいられるってことですかね!」
こんな当たり前のことを聞くなんてトレーナーは変わっているなあ
「お〜嬉しいこと言ってくれるね〜」

トレーナーさんがよろこんでくれたやった
「嬉しいに決まってるじゃないですか!!私…ずっと待ち望んでたんですから」
「けどまあ、キタちゃん」
「なんですか!」
なんですか!なんでもどうぞ!!
「トレセン学園だったら自分なんかよりもずっとすごいトレーナーたくさんいるし、キタちゃんだったら選り取り見取りだと思うよ」
どうしてそんなこと言うんですか
「は?」
どうしてそんなことを…
彼は私を選んでくれないってことですか?
なんで?
どうして…
「えっ?」
「トレーナーさんは私のこと選んでくれないんですか」
搾りだした自分の声は驚くくらいに小さな声でそして、懇願するかのようなものだった。

いやだ…
彼と一緒にいられないの？
そんなのは絶対に嫌だ
嫌だ嫌だ嫌だ!!!!!
「いや…その…」
「選んでくれないんですか？」
「僕なんかがトレーナーでいいんだったら全然いいんだけども…
いいの？」
「トレーナーさんじゃなきゃ嫌ですよ」
よかった～
もちろんトレーナーさんじゃないなんて論外ですよ
彼以外に教わるくらいだったらダイヤちゃんには申し訳ないけど退学だって視野に入れてたから、これで一安心かな！
「わかった。
正式に担当トレーナーとウマ娘が決まるのはもう少し先だけどよろしく頼むよキタちゃん」

「もちろんですよ、トレーナーさん！」
「けど、、、どうして自分がいいの？
　その…言っちゃあなんだが、実績としてはその…めちゃくちゃ結果を出せているわけではないよ僕」
「そりゃあだって、将来の結婚相手ですもん！」
　一目惚れでした!!
「あ～そういえばそんなこと昔言ってたね。なつかしいな」
「逃がしませんから」
「ん？ごめん聞き取れなかった。」
「いえ～これから楽しみだな～って思って」
「そうだな。トレセン学園は色々楽しいところだと思うから一緒に頑張ろうな」
「はい!!」
　絶対に逃がしませんからね、トレーナーさん

　時は流れ私はは高校生になった。
　高等部でも今まで同様に彼が自分の担当トレーナーとして継続することになった。
「トレーナーさん

やっと私…トレーナーさんと結婚できます!!」
正確にはもう少し先だけど私はもう少しで１６歳だ。
もう遠慮する必要もないよね…
「これからは婚約者としてずっと一緒にいれますね！」
それはウマ娘としても
そして将来のパートナーとしても
「婚約者!?何のことでせうか…」
またまた～
とぼけたふりなんて面白いんだから～
無駄ですよ？
「ん？」
「あれ？」
「いやだな～トレーナーさん。私の結婚相手になってくれるってずっと前から言ってくれたじゃないですか～」
「そうですよね」
「いや…そうだったけなあ…なんて」
「そうですよね」

「まさかとは思いますけど忘れただなんて言いませんよね？トレーナーさん」
「まさか…覚えてるよ、ハハハ…」
言質とった～～～～～～！！！
無論、彼が本当に嫌がっているようだったらあきらめるつもりだった。
けれど中等部の三年間を過ごして分かった。
私にも可能性は十二分にあると
ここから高等部の三年間、恋のダービー逃げ切って見せますよトレーナーさん？

キタちゃん「トレーナーさんと結婚します」 ～トレセン学園入学前

私はいつも欲しいものは一目惚れで決めてしまう
そうした判断がうまくいったこともあったし、反対に失敗してしまうことも多々あった。
けれど、彼との出会いは…
彼を何としてでも手に入れたいと思えるほど、今では恋焦がれている。
初めて彼と出会ったのは、トレセン学園に憧れのテイオーさんに会いに来た時だった。
親友のダイヤちゃんと一緒にトレセン学園に来たのはよかったのだが、学園に入るためにはどうやら許可が必要だったらしい。
残念ながら許可をもらってなかったため残念だけど今回は出直そう、
ダイヤちゃんとそのように話をしていた時だった。
「あれ？君たちどうしたの？」
校門で困っている私たちを見かねて声をかけてきてくれたのが彼との初めての出会

いだった。
っ!!この人は!!
何故だかわからないがたった今出会ったばかりの彼に私はとても強く興味を惹かれた
今までこんなことは一度もなかったのに…
いったいなんだというのだ。
欲しい…
「えっと…今日はマックイーンさんと、テイオーさんに会いたくて、ここまで来たんですけど許可がないと入れないみたいなので出直そうかと思ってまして…」
ダイヤちゃんがそのように答えると彼は少し考えた後、親切にも私たちを学園内へ誘ってくれた。
「テイオーさんか～、テイオーさんは忙しいから会えるかはわからないけどもし君たちが良ければ学園を案内しようか？」
「いいんですか!!??」
思いもよらないお誘いに私たちは二つ返事で賛同した
「いいよ～折角ここまで来てくれたんだからこのまま帰るのは少し勿体ないしね」
そういうと彼は校門で守衛の方と話をつけ、私たちを学園へと招き入れてくれた。

「よかったねキタちゃん！」
「うん！やったねダイヤちゃん！」
今まで感じたことのなかった感情に困惑しつつも、
とりあえず学園に入れる幸運をダイヤちゃんと一緒に喜ぶことにした。
どうやら彼はこのトレセン学園でトレーナーをやっているらしい。
そのおかげもあってか今回は私たちはゲストという形で見学を許可されたのだという。
そこからは無事にテイオーさんにも、マックイーンさんも会うことが出来て本当に幸せな
時間を過ごすことができた。
「「ありがとうございました！トレーナーさん!!」」
しかし楽しい時間も束の間、空も暗くなりそうだということで帰る時間となってしまった。
「楽しかったねキタちゃん！」
「そうだね！ダイヤちゃん」
あんなにも楽しかったのにこのもやもや感は何だ？
目的だったテイオーさんにだって会うことができたし、いったい何がこんなにも私の

心
をざわつかせるんだ?!
分からない…
けど…このままじゃダメな気がする
「楽しんでくれて何よりだよ。もし君たちがトレセン学園に通うことになったらそん時はまたよろしくね」
「もうすぐ暗くなるからすぐ帰るんだよ」
そう言って彼は私たちを校門まで送った後また学園の方へと歩き出そうとした。
待って…
ここで彼と別れたくない…
「待って!!」
「キタちゃん?!」
「どうした?!」
トレーナーさんとダイヤちゃんが二人とも驚いている。
「あの…その…
連絡先を…交換しませんか」
「連絡先? いいよ。ラインでいいかな?」

「あ～！キタちゃんだけずるいよ～私もお願いします」
やった!!
うれしい！うれしいよ!!
これからもトレーナーさんと会うことができるかもしれない
そう思うと不思議と胸が高まるのを感じた。
こんなにもトレーナーさんのことを考えると胸がざわつくなんて…
けどそれがとても心地が良いと感じている
この気持ちが何なのかは後日ダイヤちゃんに相談したときに分かったのだが、
分かったからこそ全力だ
恋のダービーは絶対に譲らないんだから
トレセン学園で待っててねトレーナーさん!!!

キタちゃんとダイヤちゃんを応援する会（非公認）

「ダイヤちゃんとキタちゃんのお二人…良い…すごくいい…」
日課であるキタサンブラックとサトノダイヤモンドの見守りの最中に、
ふと隣にいるデジタルがそんなことを呟いていた。
キタサンブラックことキタちゃんと、サトノダイヤモンドことダイヤちゃんが仲良しである様子は学園でも有名である。
そして僕もキタちゃんとダイヤちゃんを陰ながら応援する会（非公認）の副会長である。
ちなみに会長はデジタルである。
会員数は現在４名だけだが、陰から彼女たちの様子を見ているだけで、それをおかずに飯が何杯でもいける。
そうこうしている間に、デジタルが本当に米を取り出し始めた。
すげえな…こいつ…どこに米を隠し持っていたんだ？
「尊いな…デジタル氏」
モグモグ

「ちょっと今」
モグモグ
「彼女たちをおかずにしているところなんで後にしてもらえますか。トレーナーさん」
流石会長（）
見習わないといけないこの姿勢
おっ！
ふとキタちゃんとダイヤちゃんの方を見てみると、他のウマ娘ちゃんに話しかけられているみたいだ。
少し距離は離れているせいで声は聞こえないが…
こういう時のために唇読術をマスターしておいてよかった。
まるで聞こえてるかのように彼女たちの会話が分かる
どれどれ…

モブウマ娘ちゃん「二人ともとても仲良しだね」
ダイヤちゃん「もちろん！キタちゃんとは大親友ですよ～」
キタちゃん「ダイヤちゃん！私もだよ!!」
「「えへへ～」」

モブウマ娘ちゃん「そんなに仲良くて羨ましいよ～
もしかして～二人は付き合ってたりしちゃったりして?!」
キタちゃん「いやいやいや／／／ただの幼馴…」
ダイヤちゃん「はい！付き合ってます！」
キタちゃん「幼馴…」
ダイヤちゃん「付き合ってます!!」
キタちゃん「ダイヤちゃん?!」

これは付き合ってますね（断言
いいものを見させてもらったよ…
「素晴らしいものを見た…そうは思わんかねデジタル氏」
返事がない
「デジタル氏?」
おかしいなと思いデジタルの方を見ると彼女は死んでいた。
おそらく耐えられなかったのだ。あの尊さに。
「バカたれが…」
「なんて幸せそうな顔をして死んでるんだ」

「はっ!?ここは私は二人を見て…それから」
「おはようデジタル」
「おはようございます!トレーナーさん」
「あっ!思い出しました。素晴らしいものを見た…そうは思いませんか?
　トレーナーさん」
「もうやったよ。そのやりとり」
「そうでしたか…それは失敬」
「腕を組んで歩くくらいは疑問なくできるくらいには仲良しなのは素晴らしいと思います」
「僕は腕組むより手をつないでる方が好き」
「んん～。それも捨てがたいですね～」
「けど腕を組むくらいに密着してしてるのも好き」
「流石～わかってますね。トレーナーさん」
「そういえば二人って同室なんだよね確か」
「そうですとも!逆にあの二人が同室じゃなかったら理事長に抗議しに行ってましたと

も」
「間違いない」
「たまに…一緒の布団で寝たりして…じゅるり」
「毎日でもいいよ^^」
「…いい…すごくいい」
「それにどんなことがあったとしてもサトノ家の権力でそうにでもなりそうだから、
　二人の幸せが確約されてそうなのもいい…」
「デジたん的には、
「逃がさないからねキタちゃん」
　って寝ているキタちゃんの耳元でダイヤちゃんがささやいていてほしいです」
「キタ×ダイヤなんだけどダイヤちゃんからの愛がとっても重い感じですねわかります」
「次の新刊のタイトルは「逃がさないよキタちゃん」にしますか！トレーナーさん」
「いと素晴らしき考えなり」
　今日もデジタルとトレーナーの妄想は止まらない。

ダイヤちゃんに借金してみた

「さて…トレーナーさん」
「あなたには今二つ選択肢があります」
「聞かせてくれ」
「一つは借金の方にマグロ漁船に乗せられるって選択肢です♪
　しかし、これは私としても望ましくありません…」
「それでは…二つ目の方を聞かせてもらっても?」
「はい!トレーナーさん、
　二つ目はこの婚約届にサインをすることです♡」
「なに? 婚約届?!」
「トレーナーさんにとっても悪い話ではないはずですよ〜
　今まで通りの生活も送ることができますし、何より今後はサトノ家の婿として一生お金に困る生活はさせませんよ?」
「…少し考えさせてくれ」

「むう～トレーナーさんったら焦らしますね。
分かりました。明日また答えを聞きますね」

はじめはほんの些細な気持ちからだった。
「今月は金欠だな～」
トレーナー室でふとそんなことを漏らしてしまった。
それが失敗だった。
「金欠なんですか？トレーナーさん？
「ん？あ～…変なこと言ってごめんなダイヤちゃん。
忘れてくれ」
「お貸ししましょうか？トレーナーさんにだったらいくらでも」
「いやいやいや、流石にまずいでしょ」
「遠慮しないでくださいトレーナーさん、
それにトレーナーさんだって返してくれるつもりならいいじゃないですか」
「まあ…そうだけど…」
「それだったらいいじゃないですか！
けど…そうですね…

少しお手数をおかけしてしまうのですが、この契約書にサインしてくれるだけでいくらでもお貸ししますよ♪」
「…来月には必ず返すから」
「はーい、じゃあサインの方お願いしますね？」
サイン完了
「はい！確認しました。
はい。どうぞトレーナーさん」
「っおいおい、随分と多いな。こんなに要らないぞ？」
「必要な分だけで使ってくださればいいですよ～」
「分かった。助かる。
来月には必ず返すから」
その月はダイヤちゃんが貸してくれたお金のおかげで何とかしのぐことができた。
次の月にしっかり借りたお金も返していつも通りの生活に戻るはずだった。
しかし人間慣れとは怖いもので、再び金欠に陥ると何度も自分の担当ウマ娘に頼ってしまった。
次第に借りる金額も増えついに返済の期間を延長してもらえるようにお願いせざる負えない状況にまで陥ってしまった。

「いいですよ。いつでもいいですからねトレーナーさん」
「ありがとう…すまない」

「…今月ももう少しだけ待ってもらってもいいか？」
「はい！大丈夫ですよ」

「今月借りた分、もう少しだけ待ってもらえると…」
「もちろんかまいませんよ」

次第に借りる金額が増えていくことは少し怖かった。
借りた分を返すためにまた借りる。
その繰り返しで気がつけば相当な金額になっていた。
にもかかわらずダイヤちゃんはいつも優しく当たり前のように貸してくれる。
そのことに罪悪感を感じつつも、ついつい彼女の優しさに甘えてしまう。

「今回もいいか？」
「だめです」

「え？」
「もういいかなって、トレーナーさん。
貸してたお金はもう待ってあげません」
「すまない…ダイヤちゃん。
もう少しだけ待って欲しい。」
「だめです～」
「けれど」
「何でしょうか」
「あなたには今二つ選択肢があります」

ダイヤちゃんから二つの選択肢を提示された。
「婚姻届か…」
婚約者にでもなってくれということだろうか。
いったいどうすれば…

「それでは返答をお聞きしましょうか。トレーナーさん」
「一つ聞かせてほしい」

「なんですか？」
「なんで俺なんだ」
「といいますと？」
「原因は俺の借金だ。
　それを取り立てるというのも理解できる。
　けど、その…婚姻届っていうのは…」
「婚姻届っていうのは？」
「やっぱりその…将来を誓い合った二人が出すものだろ？
　となると…やっぱり君は俺のことを」
「はい！大好きですよ。愛しています」
「っ！だったらなんでこんな方法」
「だからですよ？あなたが欲しい
　そのための手段の一つを使おうとしているだけです」
「もし…仮定の話だが、
　マグロ漁船の方を選んだらどうする？」
「どうもしませんよ。
　私も一緒にその船に乗るだけです」

「へ？」
「だって離れ離れは嫌ですもん」
「分かった。ありがとう
　応えるよ君の気持ちに」
「書くよ、その婚姻届。」
「やった！
　けど、賢明な判断ですよトレーナーさん」
「けど！一つ勘違いしないで欲しいことがある。」
「何でしょうか」
「これは借金のせいで書くんじゃないってことだけは言っておく」
「それは…えっと？えっ!?」
「ここまで君から言わせてしまったんだ。
　この婚姻届にすら言い訳はしたくない」
「もっと直接言ってもらえませんか／／」
「それは…」
「マグロ漁船そんなに乗りたいんでか～？」
「うぐっそれは卑怯でしょうダイヤちゃん

借金はどうにかするよ…」
「借金なんてどうでもいいんで早くいってください」
「どうでもいいなんてことは…
まあ…その、俺も君のことが好きだよ。なんて」
「わたしもです」
「「照れますねこれは」」
「「ハハハハハ」」
「それはそうと早くサインしてください。」
「あっはい」

重馬場ナイスネイチャっていいよねって話

「トレーナー×ナイスネイチャってどう思いますか？」
「大好きなカップリングの一つですけど、
なんかあったか？そのカップリングに」
「いえ…今度の同人誌即売会での内容なんですけど、
純愛系で行くかはたまたまヤンデレ系または病み系で行くかで悩んでいまして」
「あ～なるほどね。なるほど…難しい質問だな」
「ちなみにですけどデジたんは純愛路線で今回は行きたいなと考えています。」
「となると…ネイチャはトレーナーの一番になれた系の路線かな？」
「最終的にはそういうことのなりますね。」
「最終的には？ということは一筋縄ではいかない感じ？」
「その通りですよトレーナーさん」
「詳しく聞いても？」
「もちろんですとも。
デジたんが思うにネイチャさんは逸材です。

それはウマ娘としても、そして一人の女性としても」
「自分自身が面倒くさい女だと思い込んでいるからこそ、トレセン学園ではついに最後の一歩が踏み出せなかった世界線でのネイチャさんの予定です。」
「何度だってチャンスはあった。
けれど彼女は最後までその思いを伝えられないまま卒業を迎えてしまうんです」
「どっちつかずの友達以上恋人未満の関係の居心地の良さに彼女自身甘んじてしまう…」
「そして卒業後に偶然にも自身の元トレーナーさんと再会するんですよ。
そして、目撃するんです。
トレーナーの腕の中に可愛い女の子の赤ちゃんが抱かれていることに。
その赤ちゃんはよりにもよってウマ娘であるとい事実を」
「その場は久しぶりだねって軽く会話をするだけだけど、
その場では必死に平常心を保とうとするネイチャさんの心は超重馬場状態…」
「ああ…いいなそれ…」
「そこからの展開は要相談なんだけどどうしましょうかね」
「僕個人の意見としてはは、
①▪ネイチャは自分の想いを伝えなかった結果、トレーナーさんの一番は第三者のウ

マ娘に奪われてしまったと思い込む。
②▪あの時、思いを伝えていたからといってトレーナーの一番になれていたかは分からないけど…そのチャンスがあったことだけは間違いない。
③▪けれど、それは自分にはもうどうすることもできないという悲しい現実
これらのバックグラウンドを大事にしていきたい。」
「けど、純愛ってことはその腕に抱えてるウマ娘ちゃんの赤ちゃんは多分だけど別の人の赤ちゃんって設定なのかな?」
「その通りですとも、盛大な勘違いをするところから物語は動き出す…」
「それでもなお、ネイチャの場合は元トレーナーを笑顔で送り出すくらいは平然とやってのけそうだよな」
「実際はまったく平然なはずないのに…それでも最後の力を振り絞って平然といようとする彼女の精神には脱帽ですよほんと」
「ああ…あたしってどこまでいっても一番になれないんだ…
って自分自身への嫌気が募る中で振り絞るように聞くんですよ」
「「あはははは…その赤ちゃん可愛いですね」って、
「結婚したんだったら一言くらい教えてくださいよ〜」って」
「何とかいつも通りの自分っぽく、自分に必死に言い聞かせながら…

泣きそうになりながらも、それでも聞かずにはいられない…
だって、元トレーナーのことが好きだから！だからこそ目の前の受け入れ難い事実が余計に気になってしまうネイチャさん…
って感じですかね今考えているのは」
「素晴らしいと思います」
「とまあ前半部分の流れはこんな感じにする予定で」
「ほお…ここからネイチャが差しきる展開になるってことですか!?デジタル氏」
「私はね…トレーナーさん。純愛系の話が好きなんですよトレーナーさん」
「やったぜ」
「けどね…トレーナーさん…
私はねヤンデレ系や病んだウマ娘ちゃんもすべて好きなんですよ」
「不穏なこと言わないで…幸せにさせてあげてよ～」
「…」
「沈黙が怖い?!」

勘違い系　重馬場ナイスネイチャ

トレーナーさんは残念ながらもう他の人のものになってしまったようだ。
だめだ。泣きそうだ
あははは…
そうですよね～
トレーナーさんくらいいい人だったら結婚相手の一人や二人いてもおかしくないですよね～
いや～ほんと馬鹿みたい…
いや～ネイチャさん的にはもしかしたらトレーナーさんと自分と一緒になってくれるかもしれないなんて考えていた時期もあったわけですよ～
本当に馬鹿みたい…
このままだとほんとに泣きだしてしまいそうだ。
いきなり目の前で泣き出すような面倒くさい存在にはなりたくない。
取り繕え。
悟らせるな。

いつも通りの私でいろ。
「可愛い赤ちゃんですね～」
ハハハ…
ほんとに可愛いや…
子供があたしと同じウマ娘ってことはお相手さんもウマ娘ってことだよね…
ほーんと、私じゃダメだったのかな。
「おおっ！ありがとう。ネイチャ」
「けど…トレーナーさんも隅に置けませんね」
「ん？」
「一言くらい…その言ってくれたっていいじゃないですか～
いや…まあいいんですけど」
一言くらいあってもいいのではないか。
言うまでもないことだって言うんだったらいいけど。
結婚くらい大きなことだったら。
「待ってくれ!?何のことだ？」
「いやいやいや、今更取り繕わなくたっていいですって、
けど元担当ウマ娘である私に一言くらい報告してくれてたって…

な～んてね、思ったりしちゃったりして…」
この期に及んでしらばっくれる気なのか
「だから何のことだって…」
ダメだ…
我慢しろ…
「…本気で言ってるんですか」
「わからな…」
「いつのまに結婚なんてしたのかって聞いてるんですよ!!」
いきなり大きな声を出した私に流石にトレーナーさんも驚いたようだった。
やってしまった…
あ～あ。
こんなんじゃほんとに面倒くさい女じゃん
「?してないよ結婚。そもそも相手がいないし」
ん?どういうこと?
「いやいやいや。じゃあその手に抱えている女の子は誰の子だって話ですよ」
「あ～!なるほどね。完全に理解した。
この子は姉さんの子供だよ。

いま姉さんの都合で預かってるんだよ」
「へ？」
マジで言ってる？
私の早とちりってこと?!
「ハハハハハ、もしかしてネイチャさんは妬いてくれたりしたのかな？」
「相手なんてまったくいないから安心してよ、
したくても相手がいませ～～ん笑」
「…ごめんなさい!!トレーナーさん。私ほんと…
勘違いしちゃって、勝手に舞い上がって…」
「いいって。いきなり昔の知り合いが結婚なんてしてたら驚くよな
分かるよその気持ち」
「あははは～そう言ってもらえると嬉しいです／／」
ほっんと恥ずかしくて穴があったら入ってやりたい…
けど…よかった…
トレーナーさんはまだ誰のものでもないんだ。
…
「ねえ…トレーナーさん」

「なんだ？ネイチャ？」
「トレーナーさんが良かったらなんですけど…
今度の日曜日って予定空いてますか？」
「日曜日はたいてい暇してるよ」
「ほんと…良ければなんですけど…
また昔みたいに2人でお出かけしたいな～なんて」
「ごめんなさい！やっぱり今のなしで!!
変なこと言ってごめんね～トレーナーさん」
「いや…行こう。お出かけ。」
「えっ？」
「せっかくネイチャが誘ってくれたんだ。いい機会だしぜひ行こうよ」
「いいんですか？」
「？もちろんだ」
「あははは！トレーナーさんは変わっていないですね」
「それを言うならネイチャだって」
「またまた～ネイチャさんだって結構いい女になったと思ってるんですけど」
いきなり告白とかは恥ずかしすぎてできないけど。

今はこんな感じでいいかな
「うぐっ。それはまったく否定できない…
それじゃあ詳しい話はまたラインするよネイチャ」
「オッケーです。トレーナーさん」
昔とやってることが変わっていないって？
いや…今はこれでいいかな。
けど…もうトレーナーさんのことは絶対にあきらめないからね
覚悟しててよ。トレーナーさん。

「とまあこんな感じでとりあえず考えておりまする」
「デジタル…よくここまで思いつくな」
「いや～まあ全部デジたんの妄想なんで」
「いやいやいや、よくできてるよ」
「ほんとですか！いや～やっぱりトレーナーさんはわかってくれますか！」
「けどまあ…これはネイチャ本人にはきかせられないな笑」
「当たり前じゃないですか!!!そんな恐ろしいこと言わないでくださいよ～」

キングヘイローとトレーナの物語～皐月賞

キング「いい加減目を覚ましたらどうかしら？」
トレーナー室で気持ちよく寝ていたら、自分の担当ウマ娘であるキングヘイローに起こされた。
トレーナー「んあ？あれ？今日は休日だったような」
キング「わざわざ私がここまで出向いたのよ？だったらあなたが私の自主練に付き合うのも道理でしょう？」
トレーナー（…こちとら休日返上してキングのトレーニングを考えているというのに。こいつときたら…）
トレーナー（けどまあ…それでこそキングだ）
トレーナー「分かった。準備するから待っててくれ」
キング「フフッ。早くしてよね」

トレーナー「それにしてもこんな休日まで練習していてキングはえらいな」
キング「当然よ！一流たるものこの程度で音を挙げるようじゃ務まらない!!

普段の練習なんかじゃ私は満足できないわ」
トレーナー（そのトレーニング内容は俺が何日もかけた内容ですが…キング的には不満だったか…申し訳ない）
トレーナー「分かった。今後のトレーニングの予定を変更しようか」
キング「それでこそキングのトレーナーよ！」

キングに相応しいトレーナーになれるように俺は寝る間も惜しんで彼女を支え続けた。
トレーナー「キング！今度は君の要望を踏まえたうえでこんな練習メニューを組んでみた。
今度の皐月賞絶対に勝とうな」
キング「当然よ！一流たるもの目の前のレースには常に全力なんだから」
トレーナー「よし…それじゃあまずはその前哨戦の弥生賞だ。
ここでの君の走りを見てまた話しあっていこう」

しかし結果は三着。
それも一着、二着に大きく離された決着だった。

「キングの走りは悪くなかったよ。けど相手の子たちの走りはそれを超えてきただけだ。

いいレースだったよ」

「…トレーナー、帰ってからキングの練習に付き合ってくださる?」

そう言ったキングは確かに負けはしたがまだあきらめていなかった。

「よし!そうだな。次のG1に向けて作戦も立てていかないとな」

「それでこそキングのトレーナーよ!」

皐月賞

トレーナー「ついにこの日が来たなキング」

キング「ええ。そうねトレーナー」

トレーナー「弥生賞から一か月。俺たちは今日出る子たちの中でも一番頑張ってきたと胸を張って言い切れる」

トレーナー「だから、今のキングだったら例えスペシャルウィークにだってセイウンスカイにだって負けはしないさ!だから胸を張っていってこい!!」

キング「ええ…行ってくるわ。あなたも一流のキングのトレーナーにふさわしくどんと待ってなさい」

トレーナー「ああ…待ってる」

キングとそのトレーナーがＧⅠを制す日はまだ来ない。

キングヘイローとトレーナの物語～日本ダービー

前回のレースの結果を踏まえてトレーナーとして何か他にやってやれることはないかと

思案していた。

「まだだ…これでは今までと同じだ…」

弥生賞・皐月賞とキングのコンディションは悪いものではなかった。

それどころか好調であったといってもいい。

それでも彼女はライバルたちにあと一歩届かなかった。

「俺が彼女にしてやれることは何だってする…

だから、次そこは…」

今までの練習メニューからさらに刷新し、これ以上ないくらいに彼女は仕上がった。

コンディションはパーフェクト。

あとは彼女の才能を見せつけに行くだけだ！

ーーーーーーーーー日本ダービーーーーーーーーーーー

なあ！今回のダービー、だれが勝つと思う!?
やっぱりあの三強のだれかじゃないか？
だってテレビで言ってたし！
だったら俺はあの例のお嬢さんに一票！
なんて言ったって、伝説のウマ娘の娘だぜ？
えー、じゃあ私はスペシャルウィークに勝ってほしい！だってこの前特集でーーー
――控室にてーー
キング「……来たわね、ダービー」
キング「……。……。」
トレーナー「緊張しているのか？」
キング「は、はあ!?そんなわけ…」
トレーナー「大丈夫だ」
キング「…キングは緊張なんてしていないわ」
トレーナー「そうだな」
キング「ぜんっぜん余裕なんだから！」
トレーナー「そうだな」
キング「皐月賞の時よりも何倍も練習をしてきたし」

キング「調子だって今までにないくらい絶好調よ！」
トレーナー「大丈夫だ。君が頑張ってきたのは俺が一番近くで見続けてきた。
そんな俺が保証する。
君なら勝てる！確かにライバルたちは強敵だけどそれでも一番は君だ！」
キング「っ」
トレーナー「だから…大丈夫だ」
キング「ええ…そうね。何も案ずることはないわね！今日は私が勝つ、それだけよ！」
キング「それにこのダービーは負けられないもの。お母様も勝ったダービーだけは」
キング「行ってくるわ！トレーナー。私が勝つところ見ていてちょうだい！」

トレーナー「楽しんで来い！」
キング「ええ！」
勝ってこい！キング！
誰が我々の世代で一番かを証明してこい!!
そして…母親であり、憧れを見返してこい!!!
俺はこの時一切キングの勝利を疑っていなかった。
やれることはすべてやった。

だからあとはレースに勝つだけだと思い込んでいた。

結果としてレースの女神はキングには微笑えむことはなかった。
結果は１８人中１４位。
二番人気に推された彼女は女神に選ばれなかった。
そして、周りの反応も冷たいものだった。

これであの世代の格付けは済んだな。
正直ああいう変わった性格しているけど、そういうのはやっぱり結果が伴わないとなあ。
両親ともに最強だったけど娘はそうではなかったんだな。
周りの反応はそれこそキングをたたえる声もあったが大半は落胆や、幻滅したなどの声が多かった。
その中には彼女の肉親である母親の声もあった。

キング「……。……。」

キング「……〜〜っ!!」
トレーナー「お疲れ様」
キング「っトレーナー。」
キング「…わざわざここまで迎えに来たの？あなたも暇な人ね」
キング「今回は…勝てなかった。ダービーは負けてしまったけど。」
キング「まだ私の、私たちの！クラシックは終わっていない。次の菊花賞で結果を残せば…」
トレーナー（…そうだ、まだ菊花賞がある。夏をはさんで地力を大きく伸ばすことだって可能だ。今回は頂点に手が届かなかったけど次は…次こそは）
何の根拠もなかった。
今回の日本ダービーではこれ以上ないくらいにはコンディションも整えていった。
練習だって誰よりもした。
それでも届かなかった。
そこまでしても勝てなかったのだ。
それでも彼女が諦めない限りは…
トレーナー「そうだな。菊花賞に向けてがんば…」
次のレースに向けて気持ちを立て直そう。

そう思って声をかけようとした矢先だった。
キングの表情は暗い。
いったい誰からの電話なのか。
ヴー、ヴー
キング「……。」
ヴー、ヴー
トレーナー「いいのか？」
キング「……いいの」
トレーナー「そうか…」
敢えて出ないという選択肢をとるあたりキングにも思うところがあるようだ。
ただここでレースの疲れが出たのだろうか。
手に持っていた携帯がキングの手から抜け落ちた。
キング「あっ」
（カツッ）
（…ピッ）
落とした拍子に不運にも携帯の通話がＯＮとなった。
覚悟を決めたようにキングは携帯を拾い通話を開始した。

キング「もしもし…お母様？」
キングヘイローの母親「もしもし、ああ、やっと通じたわね」
キング「仕方がないでしょう。状況的に出れないことだって…」
キングの母親「ああ。ダービーに出走していたものね。そういえばすごかったわねーーー」
キングの母親「――スペシャルウィークさん。あんなに人を惹きつける走りを見たのは久々よ」
キング「…っ。そうねお母様。」
キングの母親「あの子が相手だなんて、ほんとに残念。諦めという感情も沸いたんじゃない？」
キングはしばらく母親と話した後、不機嫌そうに電話を切った。
少なくとも楽しい内容ではなかったことはすぐに分かった。
キング「ねえ…トレーナー？」
トレーナー「なんだい？」
キング「私は諦めないわ！諦めるって行為は一流であるこのキングにはふさわしくないもの！」
キング「…こんな私のわがままをまだ聞いてくれる気はある？」

トレーナー「愚問だな。例えどんな結果だったとしてもずっと一緒だとも！」
「それでこそキングのトレーナーよ！」
例え周りからどういわれようと、どう思われようと俺たちのコンビは諦めない。
そう心に誓った。
キングとそのトレーナーがＧＩを制す日はまだ来ない。

キングヘイローとそのトレーナーの物語～夏合宿前

日本ダービー後の学園トレーナー室にて

トレーナー「さて…キング、今後の練習の話をしようか」

キング「ええ…そうねトレーナー。もちろんこのキングに相応しいメニューなんでしょうね？」

トレーナー「そうだな…。今回は夏合宿がある。練習でもそうだが今回は菊花賞に向けて体力を重点的に増やしていきたいと考えている。」

キング「そこに関しては異論はないわ。菊花賞こそはもう負けられないものね」

トレーナー「キングも知っていると思うけど菊花賞はスピードとスタミナの両方が要求されるレースだ。」

キング「そうね…」

トレーナー「スピードについては今の段階でも戦えるだけの足はキングにはあると思う。だがそのスピードでも皐月賞では届かなかった。」

キング「そうね…その通りだわ」

トレーナー「続けるぞ…。今度の菊花賞ではそのスピード以外にもスタミナまでも兼

ね備えないと話にならない。二度の坂越えと３０００メートルを走るだけの体力＋最後の末脚の余力を残して走る必要がある」

キング「それで体力を増やすってわけね…」

トレーナー「ああ…ただそれだけではなくてスピードやパワーも鍛えなくてはいけないから相当大変な練習メニューになる予定だけど大丈夫か？」

キング「それ聞く必要ある？やれるかじゃなくてやるのよ！」

それが私の目指す一流ですもの。」

「それに…もう私には後がないもの…」

周りに聞こえるか聞こえないかのギリギリの大きさでキングがボソッと呟いた。

キングの口からそのような言葉が出たのは今回が初めてだった。

トレーナーである自分の目の前でこのようなことは初めてだった。

自分はそれだけ彼女から頼られる存在になっているということだろうか

自分にすら弱音を漏らしてしまうほどキングの心は追い詰められているのか

それをキングに聞く勇気も資格も今の自分にはなかった。

目の前の女の子の勝ちたいという願い一つかなえてやれない自分が情けなかった。

トレーナー「まずは夏合宿に向けて万全の状態に整えるよ。それにたまには息抜きでもしないとね」

キング「トレーナー。そんな息抜きなんてものにかまけている暇があったら練習しなくていいの？」
トレーナー「キング…」
キング「勝つためには勝てていない私は今まで以上に努力しないと…」
キング「菊花賞は今まで以上に難しいレースなのでしょう？それじゃあ今まで以上に頑張らないと…あの娘たちに勝てない…今まで以上に…頑張らないと…」
これは…よくない。
トレーナー「キング!!」
ビクッ
キング「な…何よ?!」
ここで伝えよう。
トレーナーとして
彼女の担当としてありのままの気持ちを
「キングの菊花賞が菊花賞を何が何でも勝ちたいっていうのはわかってる。
けど…その思いを君の担当トレーナーである俺にも一緒に背負わせてほしい。
一人で抱え込まないでほしい。
俺は君のために人生だってかける覚悟だ!!

だから…俺も君と一緒に戦わせてほしい」
君の隣に立たせてほしい。
相棒でいさせてほしい。
キング「っ！…そうね。けどあなたもおバカな人ね。私みたいなウマ娘にここまで惚れ込むなんて」
キング「それに今の内容だけ聞いたらプロポーズみたいに聞こえるから気を付けた方がいいわよ？」
トレーナー「うぐっ…そういわれると耳が痛い」
キング「けど…」
トレーナー「けど…？」
キング「いいえ…何でもないわ」
トレーナー「え～気になるな。教えてよキング。
俺だってだいぶ恥ずかしいこと言っちゃったんだから」
キング「もう！おバカ！言わせないでよ恥ずかしい」
トレーナー「え？いや…つまりどういうこと？」
キング「っっっ／／／このへっぽこ!!おバカ!!」
トレーナー「え～急に罵倒された…」

キング「／／／それで？夏合宿のプランは決まってるの？」
トレーナー「ん？ああ。せっかく海があるからね。砂浜や海を使ったトレーニングを考えているよ」
キング「それって…もしかして水着とか…着るのよね？」
トレーナー「そうだな？それがどうかしたのか。プールでのトレーニングとか今までやってきただろう？」
キング「そうなんだけど…まあ…いいわ」
トレーナー「よし！とりあえずレースってこともあるし今日は軽めに調節するか」
キング「わかったわ。先にグラウンドで待ってるわよ？」
そう言ってトレーナー室から出ていったキングを見送り自分も準備を始めた。
「俺も頑張らないとな…」
キングとそのトレーナーがＧＩを制す日はまだ来ない。

ウマ娘ちゃんの曇った顔はガンにも効く

トレーナー「途中でウマ娘ちゃんが盛大に曇るけど最後はハッピーエンドになる話っていいと思うんですけどどうですかねデジタル氏」
デジタル「デジたんそういうの好きです（語彙力）」
トレーナー「だが…敢えて言わせてほしい」
デジタル「…ゴクリ」
トレーナー「ウマ娘ちゃんが盛大に曇るけど最後はバッドエンドな話も個人的には大好きだということを」
デジタル「曇るのは確定なんですね」
トレーナー「人の心がないような展開が好きですけど何か？」
デジタル「ひえっ」
トレーナー「ずぶずぶな共依存な関係からトレーナーと死に別れてしまうウマ娘ちゃんの反応が見たいです」
デジタル「人の心がないですね…」

デジタル「けど…」
トレーナー「…」
デジタル「そういうのも好きです（小声）」
トレーナー「やったぜ」
デジタル「だって仕方がないじゃないですか!!
基本的にはデジたんはウマ娘ちゃんたちの幸せ第一で毎日生きていますけど…
幸せな時にしか見ることのできない表情がある一方で、時に曇らせられたときにしか見ることのできない表情があるのもこれまた事実。」
デジタル「デジたんはウマ娘ちゃんそのものが好きなのでその表情に優劣をつけるなんてことはとても…」
トレーナー「君が僕の担当ウマ娘でいてくれて本当に良かった…」
デジタル「よしてくださいよトレーナーさん。恥ずかしいじゃないですか」
デジタル「…心という器はひとたび…ひとたびひびが入れば……」
トレーナー「ウマ娘が不幸な目に合うのは好きだ。困難に立ち向かいそれを乗り越えるウマ娘は王道でありそしてその先にはハッピーエンドがある…というのもいいと思う。」
トレーナー「…けれど…困難に立ち向かい、そしてその困難のせいでバッドエンドに

なるウマ娘ちゃんたちはガンにも効く」
デジタル「もはやそれは困難ですらなくただただ理不尽な出来事の結果曇るっていうのもよいのではないかと愚考いたします」
トレーナー「…ごめんなテイオー。ゲームでの話だけどたURA杯まで一緒に頑張ったのに何事もなかったかのように他のトレーナーのところに移籍させて…」
デジタル「本当にすいません…。URA杯まで優勝して、一生でも背負ってやる！とまで宣言したナリタタイシンちゃんを何事もなかったかのように他のトレーナーのところに移籍させて…」
トレーナー「いったいどんな表情だったんだろうね？トレーナーの口からそれを聞かされた時」
デジタル「あ～^^」
トレーナー「深い絆を結んでいたはずのトレーナーから突然突き放される無慈悲な展開」
デジタル「担当の引退をきっかけに新しいウマ娘ちゃんと新たなスタートを自分と同じように二人三脚で歩み始める元トレーナーを見ていることしかできないウマ娘ちゃん好き」
トレーナー「場合によっては6年間も共に歩んできたトレーナーとの関係が引退を機

に結構あっさり終わっちゃったりするのは残酷なようでよくある話だな」
デジタル「…そこに救いはないのでしょうか」
トレーナー「今までとトレーナーの隣には自分がいたはずなのに、新しい娘がその場所にいるのに耐えきれるというのなら…」
デジタル「…きついですよそれは…なんと無慈悲な」
トレーナー・デジタル「「だがそれがいい」」
トレーナー（これからも長い付き合いになってくだろうデジタルも、もしそういうことになったら一体どんな表情を見せてくれるんだろうね…）
デジタル（あくまでウマ娘ちゃん目線で話していますけど、もしこれがウマ娘の立場のほうからトレーナーを見捨てられる場合だったら…
もしデジたんがトレーナーさんを見限ったとしたら…トレーナーさんはいったいどんな顔をしてくれるんですかね…）
トレーナー「楽しみだな…」
デジタル「楽しみですね…」
トレーナー・デジタル「「ん？何か言った？（言いましたか？）」」

トレーナー「何でもないよ」

デジタル「何でもないですよ」
「ハハハハハ」

特別移籍～ナリタタイシン

とある日私はトレーナーからトレーナー室に呼び出されていた。
頼りないところはあるけど、ずっと私を支えてくれたトレーナー。
不思議とトレーナーの室に向かう私の足取りは軽い。
タイシン（これでしょうもない話だったらぶっ飛ばす…）
そんなことを考え私は部屋に向かうのだった。
タイシン「それで？何？大切な話があるって。早くしてほしいんだけどトレーナー」
タイシン（トレーナーとも長い付き合いだし…もしかして…）ドキドキ
そんなことを期待するなんて馬鹿らしいってことくらい理解している。
けれどそんな存在であるほどトレーナーは私の中で大きな存在だった。
トレーナー「ああ…その話か。実は…」
トレーナー「君の移籍先が決まったんだ」
何を言っているんだ。
寝耳に水とはまさにこのこと。
トレーナーの言っている言葉の意味が分からなかった。

タイシン「は？」
タイシン「…もう一回言ってくれない？トレーナー」
トレーナー「タイシンの新しい移籍先が決まったんだよ」
トレーナー「よかったな！タイシン！
ほらっ、タイシンが前から言ってただろ？」
トレーナー「もっと上を目指したいって！だから前々からあの有名な○○トレーナーのところに打診していたんだよ！
あの人の元だったらもっと上を目指せる」
タイシン「別に…そんなつもりで言ったわけじゃ…」
トレーナー「いや～俺としても実は普段から申し訳なかったんだよな～。
正直自分の腕じゃあタイシンと釣り合ってないと思っていたからさ」
タイシン「…トレーナーのおかげで菊花賞だってとれたじゃん」
トレーナー「菊花賞か！それこそタイシンの実力が他のＢＭＷの二人を超えてただけだよ！
俺のやれたことなんてトレーナーだったら誰にだってできるよ」
タイシン「そんなことは…」
トレーナー「新しいトレーナーは俺と違ってめちゃくりゃ有能な奴だから楽しみにし

ててくれよ！
それと詳細は後日送っとくね。」
タイシン「聞いてないよ…」
トレーナー「ん？」
タイシン「聞いてないって言ってんの!!」
タイシン「そんな簡単に…私のこと…それに私の気持ちだって…」
トレーナー「心配しないでいいぞ？今までよりもよっぽどいい環境と指導者の下で練習できるだ」
トレーナー「あっ！けど新しいトレーナーにはあんまり素っ気ない態度とってあげるなよ？
素っ気ないタイシンも魅力的だけど、それで新しいトレーナーと仲が悪くなっちゃったらもったいないからさ！」
タイシン（だめだ…おちつけ…おちつけ……私）
タイシン「…トレーナーは忘れちゃったの？私をスカウトしてくれた時言ってくれたよね!?」
タイシン「一生面倒見てくれるって言ってたじゃん…」
タイシン「なのにどうして…」

トレーナー「この移籍は君のためでもあるんだぞ?」
タイシン「私は…トレーナーにとっての私は!!」
Ｐｒｒｒｒｒｒｒｒｒ……
そんな私の言葉を遮るようにトレーナーの電話がトレーナー室に鳴り響いた。

トレーナー「ん?やばい!?これから打ち合わせが入ってるんだった。
またあとでな。悪い…それじゃあ」
タイシン「まっ」
ガチャン
タイシン「…」
タイシン「…っ」
タイシン「なんで…」
タイシン「私は…トレーナーと…」
タイシン「……っ……!」
ナリタタイシンの目から涙がこぼれる。
そこにはＧＩを勝ち上がるような誰もがうらやむ少女の姿はなかった。
ただ信頼していたトレーナーから別れを告げられた一人の女の子がいるだけだった。

彼女とトレーナーの物語はそこで終わった。

ウマ娘が力加減を間違えてしまったら～ダイワスカーレット

そんなつもりじゃなかった。
私はトレーナーを傷つけるつもりはなかった
ただ少しだけうっとうしかったから、強めに突き飛ばしただけ…
あんなことになるなんて思いもしなかった。
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい

トレーナー今まで通り私を見てよ…
そんな目で私を見ないでよ…
あなたの一番でいさせてよ…

もう、あなたが誰を好きになろうと構わないわ　でも、せめて私のこと嫌いにならないで……　お願いだから……　もう、やだ……
どうして私がこんな目にあわなくちゃいけないの？

「おい、スカーレット！話はまだ終わってないぞ！」

「もういいでしょ。鬱陶しい。」

些細なことでトレーナと口論になってしまい、
イライラが頂点に達しそうだった私はそう言い放ってからその場を離れようとした。
そんな私をその場にとどめようとトレーナーが前に立ちふさがってきた
ああ…邪魔だ!!

「いい加減にしてよ!!」

苛立っていたせいか口調が荒くなる。
目の前のトレーナを突き飛ばした。
私にとってはそんな何気ない動作に過ぎなかった。

だが、私はまだ理解が足りなかった。

自分がウマ娘だということに
本格化を過ぎたウマ娘の力加減のことを何もわかっていなかった。

軽く突き飛ばす程度だったはずのトレーナーは数メートル突き飛ばされた後に、
うめき声を上げた後に動かなくなった。
血の気が引くのを感じる。

「トレーナー…？ねえトレーナってば!!」

私は急いで駆け寄った。
そこには頭から血を流して倒れているトレーナーがいた。
運が悪かったといえばそれまでだが、トレーナーは壁に頭を強打してしまったようだ。

そこで初めてわかったのだ。
ウマ娘が普通の人間を突き飛ばしたらどうなってしまうのか。
そして声をかけても返事がない

「ねえ…起きてよ。悪かったわよ…ごめんってば。
だからもうやめてよ…返事をしてよ」

明らかに目の前のトレーナーはいま異常事態だ。
それも自分が突き飛ばしたせいで。

誰かを呼ばなきゃ!?
けれどどうすれば？
誰を呼べばいい？
目の前のトレーナはどうすればいい？

パニックになった私はすべての判断がつかなかった。

「助けてよ…トレーナー」

自分の口から漏れ出たその弱音は皮肉にも自身が今傷つけてしまったトレーナーへ

助けを求めるものだった。

目の前で力なく項垂れるその存在の原因が自分にはある。

先ほどまでなかった感触があった。

ふと自身の手を見る。

そこにはトレーナーの血がべっちょりとついていた

「ヒッ…」

あろうことか怖くなった私はその場から逃げ出した。

起こってしまった事実に耐え切れなかった。

私のことを呼び止めてくれるトレーナーはもういない。

キングヘイローとそのトレーナーの物語〜夏合宿

キングとそのトレーナーがＧＩを制す日はまだ来ない。
僕らに対する周りからの反応は冷たいものだった

それは皐月賞の時にすでに分かっていたことだった。
――キングヘイローさんは頑張っているのに報われてくれないなんてかわいそうだよね。――あの子、ちょっと頭おかしいんじゃないかしら？
――さすがにあれはないよな。
――もう引退してもいいと思うんだけどなあ。
――まあ、でもあの子はお父さんの血を引いているわけだし、血統的には申し分ないわけだからね。
――それにあの子のお母さんはすごいウマ娘だったしね。
――うん、そうだね。あの人は強かったよ。
――そうね。あの人の血を引き継いでいるわけだからね。
――きっといつかは結果を残してくれると思うわ。

――そうだね。あの二人の娘だからね。
――トレーナーも大変だよなあ。
――あの性格じゃなあ。
――あのトレーナーもなあ。――……。
世間の目は冷たかった。
俺たちはただ黙々とトレーニングをこなしていた。
キングヘイローとして、そしてそのトレーナーとして恥ずかしくないように。
俺たちができることはそれだけしかなかったからだ。
そして夏を迎えたある日のことだった。
その日もいつものように朝早くからキングヘイローを迎えに行った。
彼女は今日から合宿に参加する。
水着の用意やらなんやらと忙しいだろうと思っていたのだが、
キングが言うには、トレーナーが迎えに来るまで練習しないということらしい。
そのため、練習時間の開始が少し遅れてしまったが、何とか間に合った。
トレーナーはキングの待つ砂浜へと足を踏み入れた。
キングヘイローは波打ち際で立ち止まっていた。その姿がどこか寂しげに見えるのは、俺の思い過ごしだろうか。

キングはこちらに気づくと、笑顔を浮かべて手を振ってきた。
それに応えるように手を振り返す。
彼女の表情がぱあっと明るくなった気がした。
そんな彼女の笑顔を守りたい
彼女には笑顔がふさわしい。
そのためにはどんなことだってする。
たとえ何を犠牲にしても。
キングヘイローは絶対に勝てるはずだ。

そう信じて疑わないトレーナーだったが……
その夜のことだった。
電話がかかってきたのだ。
キングは不機嫌そうな表情になった。何かあったのかと思い、尋ねようとしたその時だった。キングヘイローの母親の声が聞こえてきた。
キングヘイローの母親（以下母）「もしもし、ああ、やっと通じたわね。」
キング「……お母様？　何よ急に。私、今からトレーナーとミーティングがあるのだけれど。」

母「あら、そう。すぐに終わるわ。あなたに話したいことがあったの。」
キング「……手短にお願いできるかしら？　」
母「ええ、もちろんよ。それで、あなたの今後のことについてなのだけれども。」
キング「今後？どういう意味よ。私はまだまだこれからも走っていけるわ！　」
母「そういうことを言っているんじゃないの!!」
キング「っ！ごめんなさい　」
キング（……いけないわね。ついカッとなってしまったわ。とにかく今はお母様の話を聞かないと）
母「まったく……。」
母「……いい？よく聞きなさい。」
母「……あなたの成績が落ちてきているのは知っているでしょう。」
キング（……っ。）
母「このままでは、ＧＩレースどころか、ＧＩＩレースですら勝つのは難しいでしょう。」
キング（……うぅ……。）
母「はっきり言いますけど、これ以上続けても無駄なだけだと私は考えています。」
キング「……そんなことはない！私は諦めないわ！」

母「本当にそうかしら？」
母「もう、いいんじゃないかしら」
キング「ち、違う、私は諦めないわ」
母「あなたは頑張っているつもりかもしれないけれど、もう見てられないんです。」
キ（そ、んな……。）
母「だから、もういいんじゃないのかしら？」
キ（あ、ぁ……）
母「だから……　」
キング（嫌だ、辞めたくない、まだ走りたい、勝ちたい、負けない、誰にも、認めてもらうために、走るんだ、頑張れ、諦めちゃダメなんだ、私はまだやれる、もっと走ればきっと、きっと、きっと、きっと!!!）
母「わかってくれましたか？」
キング（絶対、勝ってみせる。）
母「はあ、全く。手間をかけさせないでください。」
キング「私が、勝てばいいのよね？」
母「あなたに勝てるの？あの…なんて言ったかしらえっと…そう！スペシャルウィークさんに」

キング「勝つわ。菊花賞であの娘たちに勝って証明するわ」
母「キッカショウ？なんかよくわからないけどまだやる気なのね…
はあ…」
キ（勝つわ。）
母「そう、なら頑張ってくださいね――――」
ブツッ　ツー、ツー、ツー、ツー
「……」
キングはただ黙って携帯を置いた。
俺の目の前にいるキングヘイローの目から一筋の涙がこぼれ落ちているように見えた。
とても悲しそうに見えた。
キングを慰めようと思ったが、言葉が出てこなかった。
かけるべき言葉を知らなかったからだ。
キングヘイローはしばらくの間、何も言わずにうつむいていたが、やがてゆっくりと顔を上げた。そして、トレーナーに向かって言う。
「トレーナーさん、今日は解散にしましょう。」
「え？」

突然のことに俺は思わず声を出してしまった。キングは俺の方を見て、少し寂しげに微笑みながら言った。

「だって、私のことなんて誰も気にしていないもの。」……

「そんなことは…」

そんなことはない。

そう言ってあげようと思った。

何よりも俺自身がキングのことを一番に考えている。そう言ってやりたかった。

ただ…こんな担当ウマ娘一人勝たせてやれないトレーナーの言葉を彼女は喜ぶのだろうか？

そう考えると気安く彼女を慰めることができなかった。

その日以降キングヘイローはただ黙々とトレーニングをこなしていたが、次第に表情からは笑顔が消えていった。

当然のように部屋にいる　セイウンスカイ

「おーい？　トレーナーさんいる？」
昼下がり、トレーナーの住む学園寮の一室。
授業から逃げ出してきたのかセイウンスカイがそこにいた。
「いないんだったら勝手に過ごしちゃいますよっと」
自分の家かのように慣れた足取りで玄関から入る。
廊下に散乱する衣類が目に入ってくる。
なんということだ！　トレーナーさんの服が脱ぎ散らかされているじゃないか！
「こら！　どうしてちゃんと片付けないんですか!??な～んてね～」
それになんだか私の物がそこそこ多い気がする。
「まあ…あれだけ入り浸ってたら物も増えるっていうか…ハハハ」
そう言いながら散らかった廊下を抜けてこれまた散らかった部屋に入る。
仕方がないなぁまったく。
普段はきちんとしてるくせに。
こういう所はだらしないんだよな～

まあ…私も人のことを言えないけどさ…
たまにはね…私は散らばった服を集めていく。
「これは洗濯機へ。あとはこの辺りに置いて……ってあれ？」
畳んでいる途中であることに気付く。
「え？　これって……」
そこには自分以外の女物の下着があった。
明らかに自分の身に覚えのないものだ。
まさか、トレーナーがこんなものを……？　一瞬思考停止する。それから慌てて頭を振る。
そんなわけないか。きっと友達のものだろう。うん、そうだよね。
じゃなかったら大変なことになるよ。ハハハ…
しかし、それでも確認せずに帰ることはできない。確かめるために恐る恐る手に取る。……レースがついた可愛いデザインだ。黒地なので清楚感がある。
間違いない。これ……女性もののパンツだ。
ていうか本当に友達のものか？
もしかしてこれはトレーナーさんの彼女さんのものではないのか？
「あはは…あれ？」

今まで感じたことのなかったこの胸の痛みは何だろうか
どくんっと心臓が跳ね上がるような感覚に襲われる。……もしかすると。
私は一つの答えに行き着いた。
そして否定するために首を振り続ける。違う。絶対に違う。
でももし……もしも、彼が私の知らないところで彼女と会っているとしたら？
一度考え始めれば止まらない。心の中に黒いモヤのようなものが広がる。
それを振り払うように首を振っても一向に晴れることはなかった。
むしろどんどん広がっていくようだった。

次の日から、私はトレーナーが信じられなくなっていた。
正直自分でも驚いている。
これでもトレーナーのことはそれなりに信頼していたはずだ。
それにトレーナーに彼女がいたって私には何の関係もないはずだ。
なのに…
私はあの日以降トレーナーと一緒にいるのが苦痛にすら感じていた。
そんな自分が嫌いになりそうだった。
けれどそれでも毎日一緒にいるせいもあってか彼の様子を目敏く観察していたと思

う。
食事の時にチラリと様子を伺えば、相変わらず美味しそうにご飯を食べている。
それを見て安心している自分がいて驚いた。
（ふぅん。やっぱりいつも通りのトレーナーに見えるんだけどねぇ）
おかしいところは何もないように思える。
おかしいのはわたしだけ。
（そもそも付き合ってると決まったわけではないし）
どうしても自分に言い聞かせないと不安に押し潰されそうになる。
悪い方向に考える自分をなんとか奮い立たせていた。
「…おい！おーーい！スカイ！……どうした元気がないぞ」
ある日のこと。いつものように話しかけてきた彼に適当に返事をする。
「別にぃ～」
「そうか？　ならいいけど」
トレーナーさんはそれだけ言うと席に着く。今日のメニューについて説明を始めるのだが、以前と違ってあまり集中できなかった。
そんな私の様子を見たからだろうか
「いや…実はスカイに聞いておきたいことがあったんだ。今時間あるか？」

「はい？」
突然の申し出に驚く。私に聞いておきたいこととは一体なんだろうか。
首を傾げながらも特に予定もないので承諾する。
「それでー。何の話かな？」
「最近ずっと上の空みたいだよな。」
どきりと心臓が鳴る。
「あー……。やっぱり、気付いちゃった？」
「まあな。なんというか……？」
「うーん。そんなに気にしないでいいと思いますけどね？」
あくまで平静を保つ。動揺してることに気付かれてはならない。
「……なあ。単刀直入に聞くけど何かあったのか？」
「え？」
「数日前くらいからじゃないか？」
「……ここまで言ってなんだけど気のせいじゃない？」
「いや、気のせいじゃない。ここ数日、明らかに様子がおかしかったから気になってたんだ。俺はトレーナーとしてだけでなく、友人としてもお前の力になりたいと思ってるんだ。

だから遠慮なく相談してくれないか？
力になれるかもしれないぞ？」
心配そうな顔でそう言ってくれる。だけど私は無言のまま彼を見つめるだけだった。
本当は聞いてみたかった。
でもそれと同時に怖かった。もし仮に彼女に会っていると言われたら立ち直れる自信がなかった。
しばらく沈黙が続く。やがて諦めたようにトレーナーさんが口を開いた。
「まあ、無理に聞き出すつもりはないが、できればいつか教えてくれよな。それまで待ってるからさ」
そう言われて黙っているわけにもいかない。
「いや……わかった。話す。その代わり他言はしないでくれる？」
「当たり前だろうが」
「絶対だよ？　約束破ったら絶交だからね」
「はいはい。分かったから早く本題に入ってくれると」
まったく、本当に分かってんのかね。私は軽くため息を吐く。
私は意を決して、今まで思っていたことを全て打ち明けることにした。
「……トレーナーさん、彼女いるんでしょう？」

「はい!?」
　途端に目を白黒させる。やはり知らなかったようだ。
「いや、いないぞ!?」
「じゃあさ、その……トレーナーさんの家にこの前いったんだけどさ」
「その私としては身に覚えのない…その下着があったというか…」
「あ～…もしかしてだけどさ?」
「ん～なにかな?」
「多分姉さんのかな…それ」
「えっ?」
「そうだ!そういえば姉さんが家に来たのってそのくらいだったな…」
「あ～…」
　その言葉を聞いて安心感が湧き上がってくる。どうやら私の早とちりだったらしい。
「……ふぅん。そうですかそうですか」
「な、なんだよ。どうして怒ってんだ?」
「べっつにー」
「いや、絶対に怒ってんじゃねえか。何が気に食わなかったんだ?」
「別になんでもないです～」

「……ったく。ほんっとにお前はよく分からん奴だな。まあいいけど」
そしてまたも微妙な空気が流れる。
「あー、それでスカイ。結局お前は何に悩んでいるんだ？」
「……そ、それは秘密！……というか忘れて！　今の話は全部無し！　いいね？」
慌てて話を切り替える。これ以上話せばボロが出てしまいそうで怖かった。
「お、おう。よくわからんがよく分かった。今日のところは聞かないでおくよ。だが、話したくなったらいつでも話してよ。俺はいつまでも待ってるからさ。それと……」
そこで一旦言葉を区切ると、彼は少し照れた表情でこう言った。
「俺とお前は友達だろ？」
（……ばか）
そんなこと言われなくても分かってるのに。
「ところでお前の方こそ彼氏の一人や二人いたりするのか？」
「はい？」
「いや、なんとなく聞いただけだ。深い意味はない」
「そんなのいませんし」
（……あれ？）
自分で答えていて気付いた。もしかすると私もトレーナーさんのこと……。

「……どうした？」
「い、いや！　何でも無いよ」
「そうか？」
　……まあ、今はこれでもいいかな。
「うん。とりあえずありがとうねー」
「……ああ。じゃあまた明日な」
「うん！　またね～」
　私は笑顔でそう言い、その場を後にした。

当然のように部屋にいる　セイウンスカイ②

「うん！　またね～」
　私は笑顔でそう言い、その場を後にした。
「ただいま～」
　自室に戻り、ベッドに飛び込む。
「あーー」
　枕に顔を埋めながら大きな声を出す。
「……好きかもしんない」
「あ、あ、あ、あーーーーーーーーーーーーーーーー」
　顔が熱い。きっと今、鏡を見たら真っ赤な顔をしているのだろう。
「ど、どっ、ど、どうかしてるよ…こんなのあたしらしくもないし…」
　心臓がどきどきしてうるさい。胸の鼓動が収まらない。
「こんなの……だめだって……」
ーーーーーーーーーーーーーーーーーー
　次の日。いつもより早く目が覚めた私は着替えを始める。

「……よし」
　準備を終えると、私は寮を出て学園へと向かった。
「トレーナーさん。ちょっといいかな？」
　朝練が終わり、教室へ向かう途中。セイウンスカイに声をかけられた。
「ん？　なんだ？」
「まあ大したことじゃないんだけどさ。実は私、トレーナーさんに聞きたいことがあって」
「聞きたい事？　ははーん。さては宿題でもやってなかったな？」
　からかうようにそう言う。
「違うって。ホントに大事な用だから真面目に聞いてね？　それで質問なんだけどさ、トレーナーさんって彼女っていたことあるの？」
　突然のことに驚いてしまう。
「え、い、いないぞ？いたこともないぞ」
「いや、本当にいないの？　嘘ついてないよね？」
「？だったらよかったんだけどな…」
「んー、いや特に理由はないけど。ほら、トレーナーさんも年頃の男の人だし、彼女がいたり、いたことがあってもおかしくないかなってセイちゃんは考えたわけですよ。」

「なるほどな…確かに理にかなってる」
「ちなみに聞きますけどトレーナーさんまさか…男の方に興味が…？」
「ちげぇよ！　まったく」
「ふふっ。ごめんって。トレーナーさんって意外とモテそうなのにね」
「……言ってくれるじゃねえか」
「あはは」
　ひとしきり笑ったあと、スカイは言った。
「まあトレーナーさんに彼女さんがいなかったならいいや」
「もういいのか。まあ聞かれても大した話もできないけどさ」
「いや…待って…じゃあもうひとつだけ。もしトレーナーに彼女ができても私をまだ担当してくれる？」
「……なんだよいきなり。そんなの当たり前だろ。お前が引退しても、ずっと俺はお前の担当だよ」
　そう答えると、彼女はとても嬉しそうな表情を見せた。
「あはは。そっか。……ふふっ」
「……なんだよ。何か言いたそうだな」
「別に～。ただね…」

「はい？」
「あ、なんでもない。なんでもないから気にしないで」
「……そろそろ授業始まるから、私は行くね」
（なんだったんだ今の……）
そう思って俺は首を傾げた。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
放課後。トレーニングルームへ来た。
「あ、きたね。待ってましたよ～」
「おう！　スカイ。遅かったけど大丈夫だったか？」
「はい。すみませんね。少し野暮用がありまして…」
（野暮用？）
「それより、早速始めましょうよ～」
「おう！任せとけ！じゃあまずはストレッチから始めるか」
「はーい」
二人並んで柔軟体操を行う。
「よーし、スカイ。脚を開いてくれ」
「はーい」

俺の指示通り、脚を開くセイウンスカイ。彼女の足は、小柄で華奢な見た目からは想像できないほどに筋肉がついていることがわかる。
「あれ？　スカイって意外とガタイがいい？」
「…そりゃ女の子だって鍛えますし」
「それもそうか。よし、次は前屈するぞ」
「はいはい」
……しかし、いくらやらせてみても全く曲がらない。
「あれ？　おかしいですね。こんなに硬いはずがないんですが」
「こっちのセリフだよ。もう少し頑張ってくれ」
「むーりー」
そういって顔をこちらに向けてくる。
「そんなこと言われてもな……うーーん」
困っていると、スカイが悪戯っぽい表情を浮かべる。
「ねーねー、トレーナーさん。私に触ってみたくない？」
「は？」
「ちなみにこの体勢だと、私のお尻が見えちゃいますからね～」
「……」

「どうしたの？　トレーナーさん」
　いたずらっぽく笑う彼女は…
「何馬鹿なこと言ってるないで早く続きやるぞ～」
「あはは、顔真っ赤ですよ～」
「うるさい！　ほら！　早く立て！　そして構えて！　ダッシュしてこい！　今日はこのメニューを五セットだ!!」
「えー、勘弁してくださいよ～」
「ダメだ!!　文句言わずに走って来い!!」
「わかりましたよ～」
―――――――――――――――――――
　計測したデータを確認する
「あっ！　トレーナーさん。この前よりも速くなってますね～」
「そうだな！　スカイの走り込みの成果が出てきたのかもな！」
「うん。それは私も何となく感じてたかも。もしかすると、次のレースでも勝っちゃうかもね～」
「調子が良いみたいだな。でも油断大敵だぞ」
「ってことで追加であと１０本行こうか」

「おっといけない」
　なんやかんやでそのまましばらく走ると、すっかり日が暮れていた。
「よし、じゃあここらへんで今日は終わりにしようか」
「はいはい。セイちゃん疲れちゃいました～」
「ははは。今日も良く頑張ったよスカイは」
「ふぅ……」
　セイウンスカイは座って一息ついた後、おもむろに口を開いた。
「ねえトレーナーさん。今って時間ある？」
「ん？　まあ今日は特に予定はないけど」
「じゃあさ、ちょっと話さない？」
「……？」
　それから他愛もない話をいくつかした後、突然彼女が言った。
「トレーナーさんってさ、今幸せ？」
「え、それを聞くか今、普通」
「聞きたいなぁ。教えてくれないなら、もう二度と質問には答えないよ？」
「そんなに面白い話でもないと思うんだけどなぁ・・・」
「ごくり」

「はぁ、わかったよ。じゃあ言うけど、俺は……」
「……俺は？」
「俺は、今幸せ…だと思う。」
「毎日はそれなりに充実しているし、担当ウマ娘にも恵まれた。」
「こんな事いうのは少し恥ずかしいけど、スカイのトレーナーになれて毎日が楽しいからかな？…な～んて」
「ふふっ。そっか。じゃあ私も幸せ者だね」
「……というと」
「私はさ、こう見えても昔は結構悩んでたんだよねぇ。自分の将来とか、これからのことを」
「……それで？」
「もちろん今は全然そんなことないよ！むしろ私は、すごく恵まれていると思っている。」
「……？　よくわからないな」
「うーん、まあ簡単に言えば、私はずっと逃げてきたんだよね。いろんなことから。」
「ずっと……？」
「そそ。私ってこんな性格だからね。だけどトレーナーさんと出会って、私は変われた。

……いや、違うか。トレーナーさんと出会ってから、私は本気で向き合うことができるようになったんだ。」
「だから、本当に感謝してる。ありがとねトレーナー。」
　そういってスカイは頭を下げた。
「いや、別にお礼なんていらないよ。やったことはトレーナーとして当然なことだし」
「でも、それだけじゃないでしょ？」
「……」
「あの時、私を見捨てることなく救ってくれたこと。それが一番嬉しいな」
「救っただなんて大袈裟な…俺は君が思ってるような、そんな大した人間じゃ無いよ。」
「またそういうこと言う。ほんと素直じゃないな～。」
「そんな素直じゃないトレーナーさんに私から一つ意地悪です」
　彼女は、急に真剣な表情になって俺の方を見た。
　そして、ゆっくりと口を開く。
「トレーナーさん、大好き！　付き合ってください！」
「……!?」
「な～んて♪ドキドキしちゃいました？」
「……はぁ～～～～……

勘弁してくれ…心臓が止まるかと思ったぞ…」
「意地悪ってこれか～。本当…マジで…まだ心臓が戻らん」
「にゃはは～効果てきめんってね」
「…帰るか」
「そうだねトレーナーさん♪」

当然のように部屋にいる　セイウンスカイ③

「寮まで我慢するのがめんどくさいな～」
　練習終わりのグラウンドでふとそんなことをスカイが言い出した。
「ねぇトレーナー室のシャワー貸してくんない？」
　汗でベトベトだし」
「ダメです」
「いいじゃんケチ～」
「ダメなものはダメです」
「えぇ～」
「といいつつ？」
「だめです」
「またまた～」
「ダメだぞ。絶対に許可しない」
「えー、じゃあもういいや～」
　セイウンスカイは、そういってその場をあとにしようとする。

「……」
「じゃあ今日はもうお風呂はいいや」
「……」
「……」
「はあ…」
「おっ！」
「あんまりほかのウマ娘とか先生には他言しないでくれよ…？」
「いよっしゃあ！　わかってますって！　にゃはは！」
「まあ……たまになら、構わない」
「やった！　じゃあお言葉に甘えて！」
　トレーナー室に移動
「はいタオル。今日だけだからな」
「はいはい。了解ですよ。トレーナーさん」
「あとは…着替えとかどうすんの」
「それは大丈夫。私のロッカーの中にちゃんと入ってるから」
「ええ…」
「なんでそんな微妙な顔するんですか！　失敬な!!」

「早く浴びてきな」
「はいはい」
　バタンッ
「はぁ……疲れた」
「今日も頑張ったな……。俺は」
「……」
「ふぅ……なんか疲れたし、今日は早めに寝るか……」
　しばらくするとシャワーを浴び終えたスカイがシャワー室から出てきた。
　すっきりとした表情で。
「はー、気持ちよかった～」
「んじゃ私はそろそろ帰りますね～」
「ああ。気をつけて帰れよ」
「はいはーい」
「あ、そうだスカイ」
「ん？　何？」
「明日はオフ日だから、トレーニングは休みな」
「あ、そうだったっけ。じゃあお昼寝でもしようかな～トレーナーさんも一緒にどうで

すか～？」
「遠慮しとくよ」
「あはは。相変わらずつれないなぁ。もう……」
「じゃあ私は行きますね。シャワーありがとねトレーナーさん」
「う～い」
　そう言って、セイウンスカイは帰っていった。
「……」
「さてと……仕事しますか……」
　トレーナーはいつものように仕事をし始めた。
「うわ……この書類の山、いつ終わるんだよ……」
　深夜二時頃
「……ん……あれ……？」
　トレーナーは目を覚ました。
「……トイレ」
　トレーナーは用を足したあと、そのままトレーナー室で仮眠を取ることにした。
「ふぁぁぁ～……　もうちょっとだけ寝ようかな……」
　椅子に座って数秒で、自分は眠りに落ちてしまった。

「……んぁ……？……朝か……そっか、昨日の夜からずっとここで作業してたもんな……」
「さてと、今日の会議等の予定は何も無いし、このまま二度寝でもするか……」
　コンッコンッ　ドアがノックされた。
「誰だよ……こんな時間に……」
　ガチャリ　そこには、制服姿に変装したセイウンスカイがいた。
「おはようございます☆」
「……!?」
「今、起きたところ？」
「まあ……一応は。」
「ふーん。ちなみに、もう7時だよ？」
「えっ!?」
「まったく……トレーナーさんは、自分が思ってる以上にだらしないね～」
「はは……面目ない」
「じゃあ、はいこれ。差し入れ持ってきましたよ～」
「おぉ……」
　彼女が持ってきた袋の中には、何種類かのパンが入っていた。

「どしたのこれ」
「いや～セイちゃん的に今日は朝ご飯をトレーナーさんとご一緒したいな～と思いましてね」
「えへへ。じゃあ食べよ！」
「まあ、ありがたくもらうよ。」
「じゃあ、いただきます」
「……ん。うまい」
「……！」
「ほんとに、おいしいな」
「でしょ～。私のお気に入りのお店なんだ～。私のこのパンも美味しいよ！」
「ん」
　トレーナーは彼女の言った通り、そのパンを食べてみた。
「あ、ほんとだ。こっちも、なかなか」
「でしょでしょ！」
「ねえトレーナーさん」
「ん？」
「今日一日暇？」

「特に何もないし、午後からだったら暇だな」
「良かった～。実は私ね？　新しいシューズが欲しくなっちゃったから一緒に買いに行こうと思いましてね」
「……」
「……だめ？　行こ～よ～」
「はぁ……わかったよ」
「やったぁ！　デートだね♪」
「違うけど」
「照れなくてもいいのに～」
「はいはい」
「で、どこに行こうか？」
「とりあえずトレセン学園を出て、商店街の方に向かって歩こうかなって」
「りょうかい」
「それじゃあ放課後またね」

ナイスネイチャ「お金持ちのイケメン彼氏を常時募集中で～す」

ナイスネイチャ「お金持ちのイケメン彼氏を常時募集中で～す」
そんなことを宣っていた入学当初の私。
なんなら語尾まで違ってたと思う。
「スズカ～一緒に頑張ろうぜ！」
ほんとにこれ私が言ったの?!
と疑問に思うくらい今と私とキャラが違いすぎるんだけど、、、
あ～恥ずかしすぎる……
けどさあ…ネイチャさん的にも言い分があるっていうか…
そりゃまあ？私だって高校デビューっていうの？に憧れてなかったといえば嘘になるし…
スタイルにだってそれなりに気を使っていたし、
それに顔だってそんなに悪くないと思ってたし…
その時はまだウマ娘としても自分がまだまだ無限の可能性を持ってると過信してい

たというか…

だから！その…自惚れていたのは仕方がないといいますか…ね？

うん。やっぱり今のナシでお願いします。忘れてください。

それにしても何だかんだこのトレセン学園に入って一年も経って現実も見えてきて今のネイチャさんに落ち着いているんですけど、、

ねえ　それについてはトレーナーさんには感謝してるんですよホント。

あの人じゃなきゃこんな風に変われていなかっただろうから……　でもさすがにこれは変わりすぎじゃないかなって、自分で思ってみたり……　いやー参ったねこりゃ

あれだけ自分のこと卑下していた私がまさかＧＩレースに出られるなんて思っていなかったですし、しかも重賞で勝負できるほど強くなれているわけだし……　それに友達もたくさん出来たし。

あ～なんか今振り返ると照れくさいことばっかりだったような気がしますよ……

もう忘れるしかないなこりゃ。

はぁ……

ん？あれ？そういえば……その私のそのトレーナ―さんは今どこにいるかな？

えっと確か普段だと今日は……　ああいたいた！

……ってちょおおおい!??ちょっと待てぇ!!?　なんであの人はあんなところで寝

てるのかな?!
いくら何でも無防備過ぎるというかさ!!?
もう、しょうがないんだから……優しいネイチャさんが起こしてあげますよっと。
トレーナー「ふわぁ～」
ナイスネイチャ「起きた?」
トレーナー「おうおはよう」
ナイスネイチャ「こんにちはだよ……」
トレーナー「すまんすまん、ついウトウトしてしまったようだ」
ナイスネイチャ「別にいいんだけど、それよりどうしてこんなところに一人で寝てるのさ」
トレーナー「ん?ああいやそのなんだ、最近よく眠れなくてな、少し外の空気を吸いたかったんだ」
ナイスネイチャ「そうだったんだ」
トレーナー「そうなんだよ」
ナイスネイチャ「……それでこの後トレーニング始めるところなのかな?」
トレーナー「そうだな」
ナイスネイチャ「オッケー分かった。今日のメニューはどんな感じ?」

トレーナー「いつも通り軽めのものから始めようと思う」
ナイスネイチャ「了解しましたっと」
いつものように他愛もない会話をトレーナーとかわす。
そう。これが私たち二人の日常であり日課。
ただそれだけなのに……
（私は貴方と一緒に居られてすごく幸せですよ～）
言葉に出せずに心の中で呟いてみる。
別に今のトレーナーはイケメンではないし、お金持ちではないけれど、
私今結構幸せです。